Office of Institutional Research KUIS

神田外語大学

ＩＲ年次報告書 2022

2022 Bulletin version Annual Report of the Office of Institutional Research

はじめに

神田外語大学 学長室 寺澤岳生です。本学は、学生の学修成果を把握し、エビデンスに基づく PDCA サイクルを強化するために、教育アセスメントとして 2016 年度から大学 IR コンソーシアム加盟校共通の「学生アンケート調査」を毎年行っています。2022 年度は、「新入生アンケート調査」、「学部在学生アンケート調査」、「卒業時アンケート調査」、「卒業生アンケート調査（既卒生対象）」を実施するとともに、新規に「企業アンケート」を実施致しました。本報告書では、これらアンケートの分析結果（抜粋）とともに、MJIR（大学情報・機関調査研究会）での発表論文の要旨をご紹介いたします。

P2 学生アンケート集計結果 ― 2019・2020・2021・2022 ―（抜粋）

P14 卒業生アンケート 2022 集計結果（抜粋）

P16 企業アンケート 2023 年 2 月 集計結果（抜粋）

P18 卒業時アンケート 2023 年 3 月 集計結果（抜粋）

P20 新入生アンケート 2023 集計結果（抜粋）

P24 大学情報・機関調査研究会（MJIR）発表要旨

P30 学長室 IR 推進チーム 主な業務・活動記録（2022 年度）

IR（Institutional Research）とは

「客観的なデータ分析に基づいた大学における諸活動の効果検証及び、情報提供を通じた大学の意思決定又は業務の継続的改善を支援すること」（山形大学次世代形成・評価開発機構 IR 部門 Web サイトより）です。大学のなかで行われている様々な活動を客観的データに基づいて分析し、データと分析結果を共有することで大学の PDCA サイクルを強化し、業務の改善につなげていく活動です。

学生アンケート集計結果　－2019・2020・2021・2022 年度－（抜粋）

●本学における共通学生アンケート実施状況

対　　象：学部在学生
調　査　方　法：グーグルフォームを利用した Web アンケート
回答所要時間　：約 18～20 分
内　　容：IR コンソーシアム共通の項目に、インターンシップや留学関係など、本学独自項目を追加（授業経験、学習態度、週当たりの学習時間、入学後の能力変化、英語運用能力、大学生活への適応、大学教育・施設への満足度等を調べる間接アセスメント調査）

実施年度	2022 年度	2021 年度
実施期間	9/7～11/2	9/15～11/4
対象者数	4,170	4,182
回答数	1,211	1,296
回答率	29.0%	31.0%
集計結果 ＵＲＬ	1 年生結果 https://bit.ly/40uzhyo 上級生(2～4 年生)結果 https://bit.ly/40aD6cf	1 年生結果 https://bit.ly/31A05nZ 上級生(2～4 年生)結果 https://bit.ly/3rFsqnk
集計結果 ＱＲコード	1 年生結果　上級生(2～4 年生)結果	1 年生結果　上級生(2～4 年生)結果

●大学 IR コンソーシアムについて

大学 IR コンソーシアム（以下、「コンソーシアム」）は、平成 21 年度文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」(GP) に採択された「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出―国公私立 4 大学 IR ネットワーク」を基盤として、同プログラムの代表校である同志社大学、連携校の北海道大学、大阪府立大学、甲南大学が中心となって、2011 年度にコンソーシアム設置準備委員会を組織し、2012 年 9 月 25 日に正式に発足した組織です。日本の高等教育における IR の必要性の広がりとともに会員校数が増加し、その社会的責任も次第に大きくなってきたことから、2018 年 4 月には、一般社団法人に移行しました。
現在では、全国の国公私立約 60 大学が加盟しています。

コンソーシアムでは、教学評価体制の基幹をなす IR ネットワークシステムの運営を行い、情報の一元管理、個別の大学での教育効果の測定および学生調査による連携大学間での「相互評価」の機能や機会を会員校に提供しています。

●共通学生アンケート調査について

共通学生アンケートは、大学 IR コンソーシアムが「学生調査」として設計したもので、授業経験や学習行動、知識・能力の獲得状況、英語運用能力のレベル、大学教育に対する満足度といった学生の認知的・情緒的側面を重視した調査項目で構成されています。大学 IR コンソーシアム会員校が共通のアンケートを継続して実施することで、学生調査の結果を大学 IR コンソーシアム会員校全体と比較でき、各大学の特徴（強み、弱み）を見出すことができます。

なお、本学では共通学生アンケートに独自項目を追加し、Web による回答で実施しています。

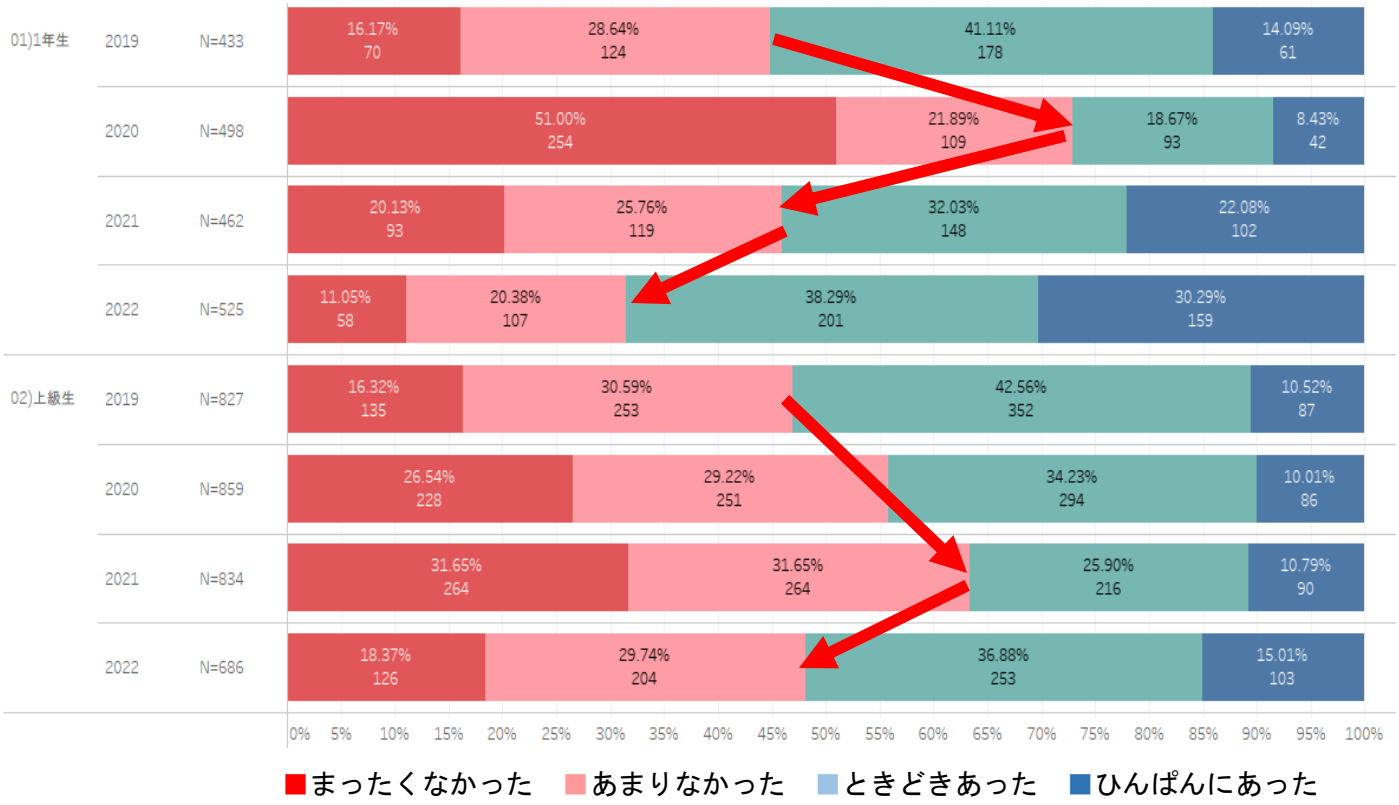
↑ステッカーを貼って回答を促進しました。

←学内ポータルにポスターを掲出してアンケート実施を周知しました。

●共通学生アンケートの集計結果　　－　2019・2020・2021・2022 年度　－（抜粋）

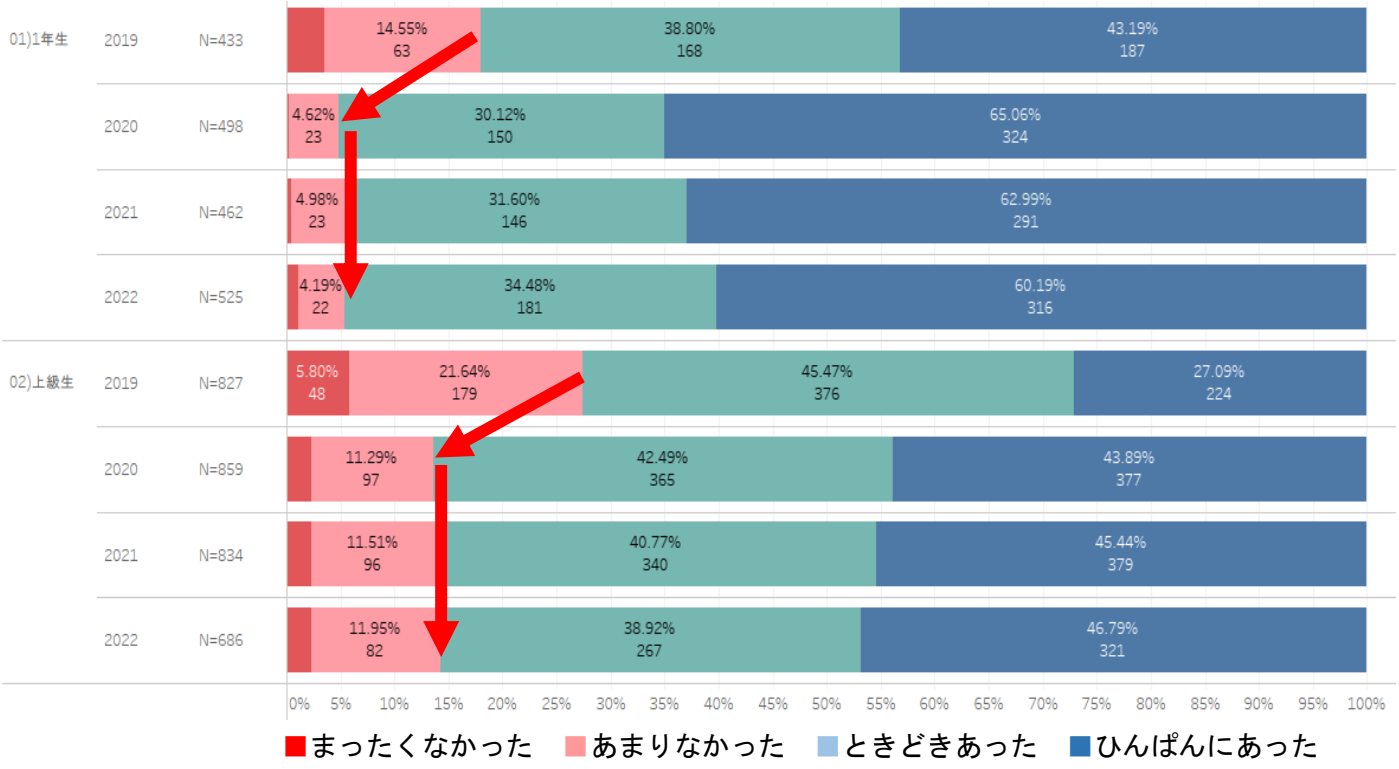
授業経験：実験、実習、フィールドワークなどを実施し、学生が体験的に学ぶ

⇒2020 年のコロナ禍から回復し、2019 年のコロナ前の水準に戻り、1 年生はさらに増加傾向。



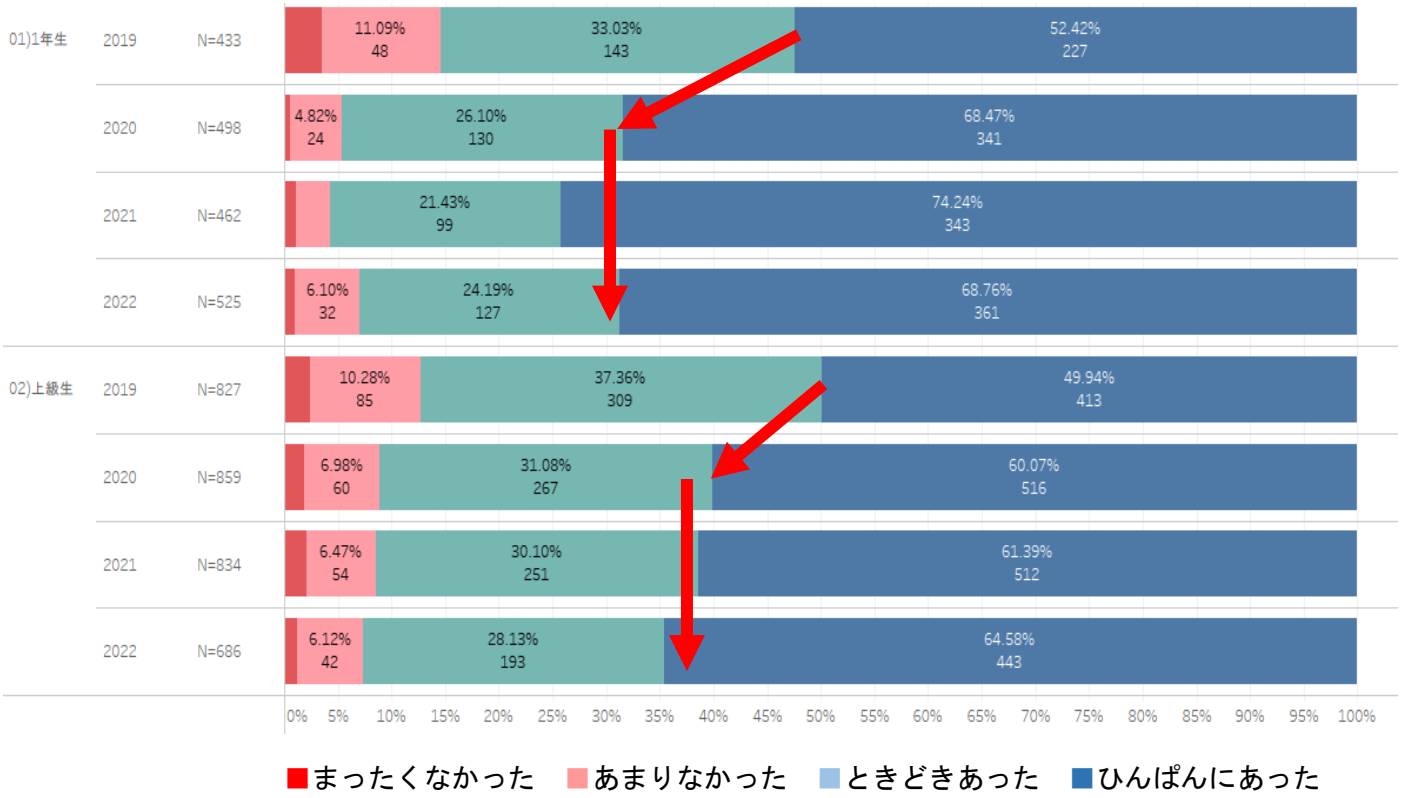
授業経験：教員が提出物に添削やコメントをつけて返却する

⇒2019 年から 2020 年にかけて増加。2020 年から 2022 年もその状況を保持。



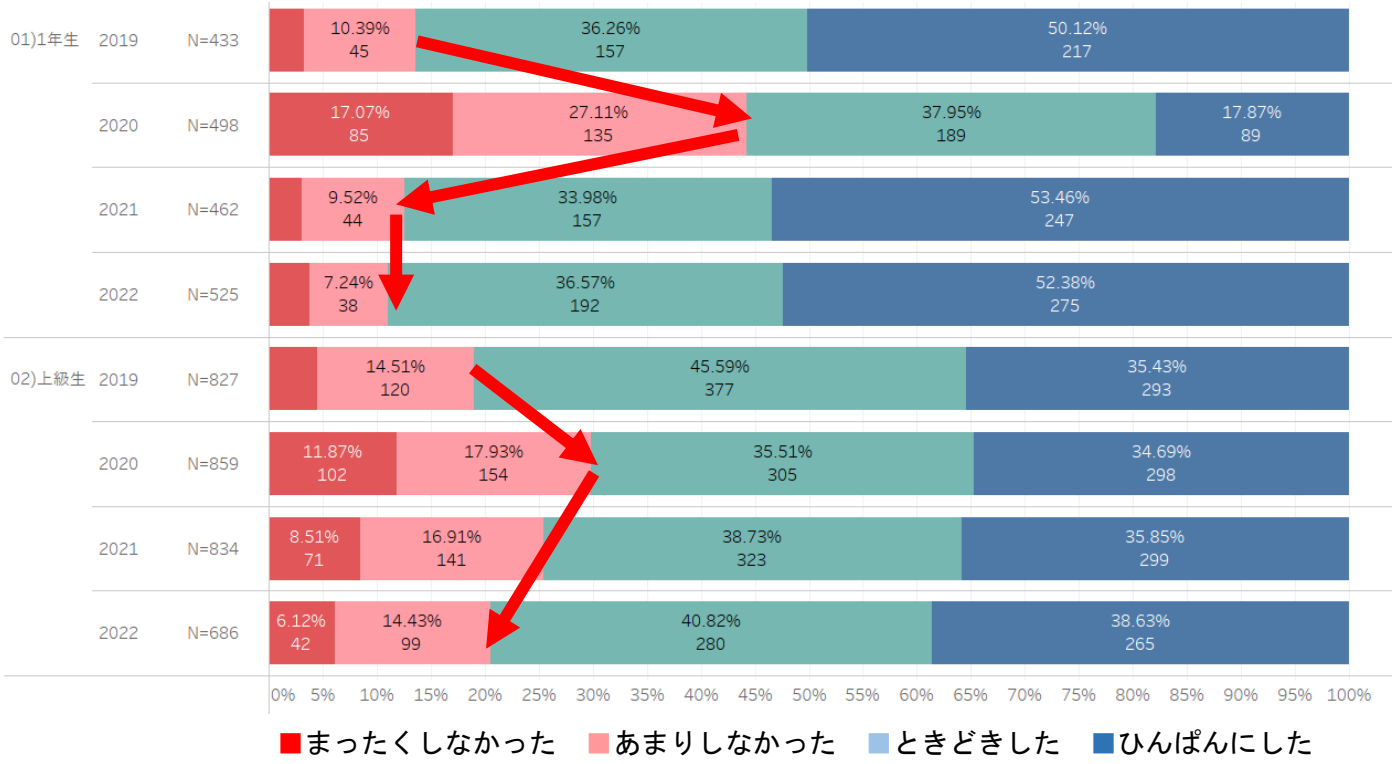
授業経験：授業中に学生同士が議論をする

⇒2019 年から 2020 年にかけて「ひんぱんにあった」が増加。その後も維持し続けている。



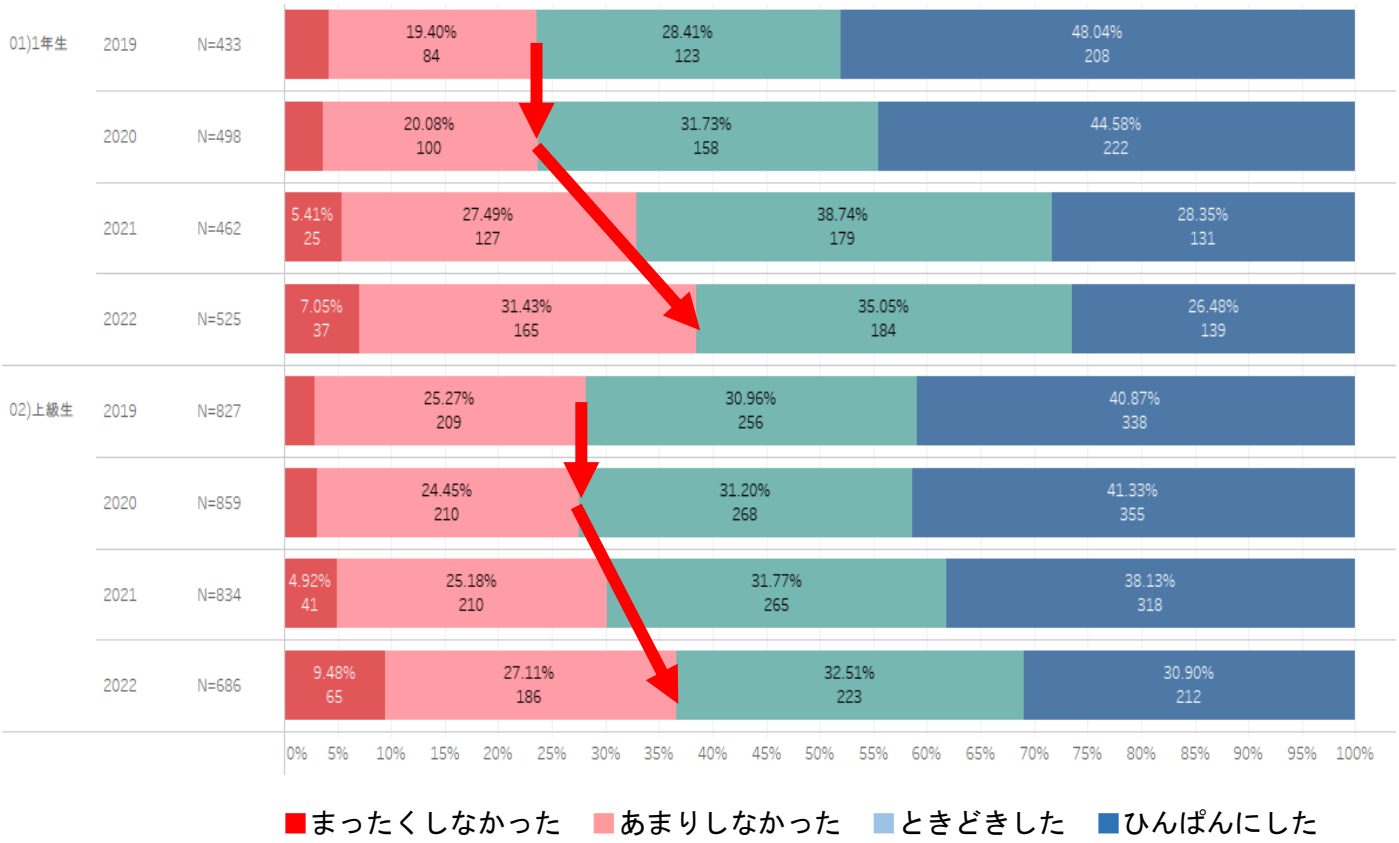
学習態度：授業時間外に、他の学生と一緒に勉強したり、授業内容を話したりした

⇒2019 年から 2020 年にかけては減少。その後、1 年生はＶ字回復。上年生は 2020 年から 2022 年にかけて回復傾向。



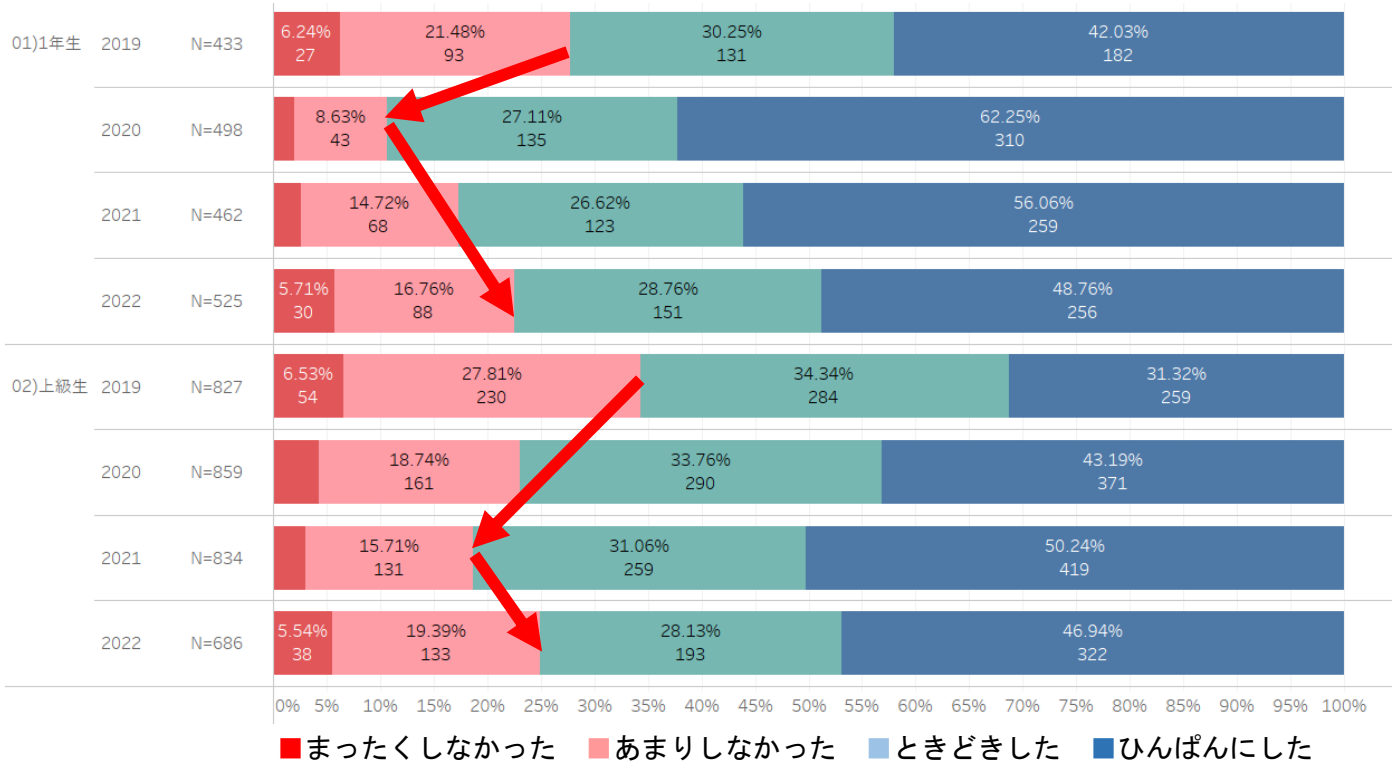
学習態度：提出期限までに授業課題を完成できなかった

⇒1 年生、上級生ともに、2020 年から 2022 年にかけて減少傾向。



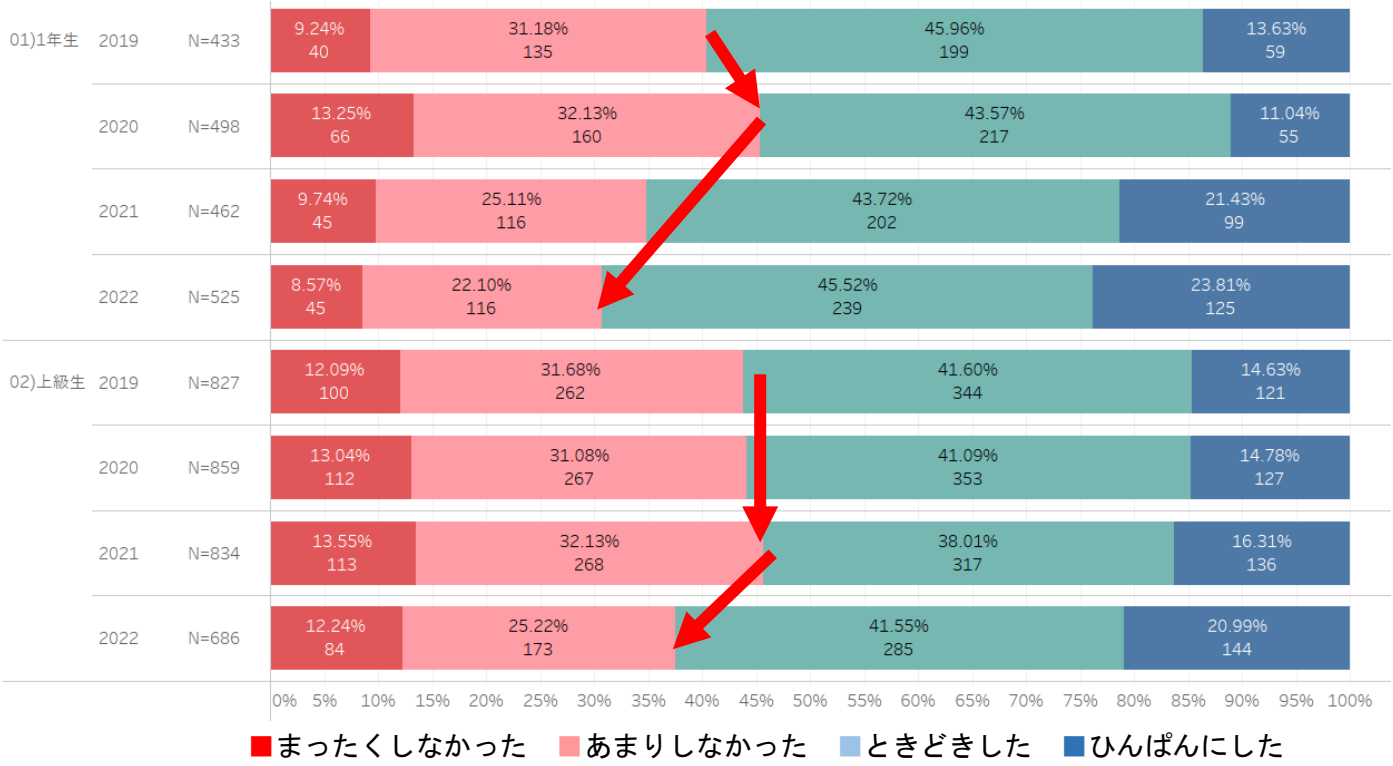
学習態度：授業に遅刻した

⇒2019 年から 2020 年のコロナ禍では大幅に減少。その後、対面授業が戻ると以前の水準に戻りつつあり。



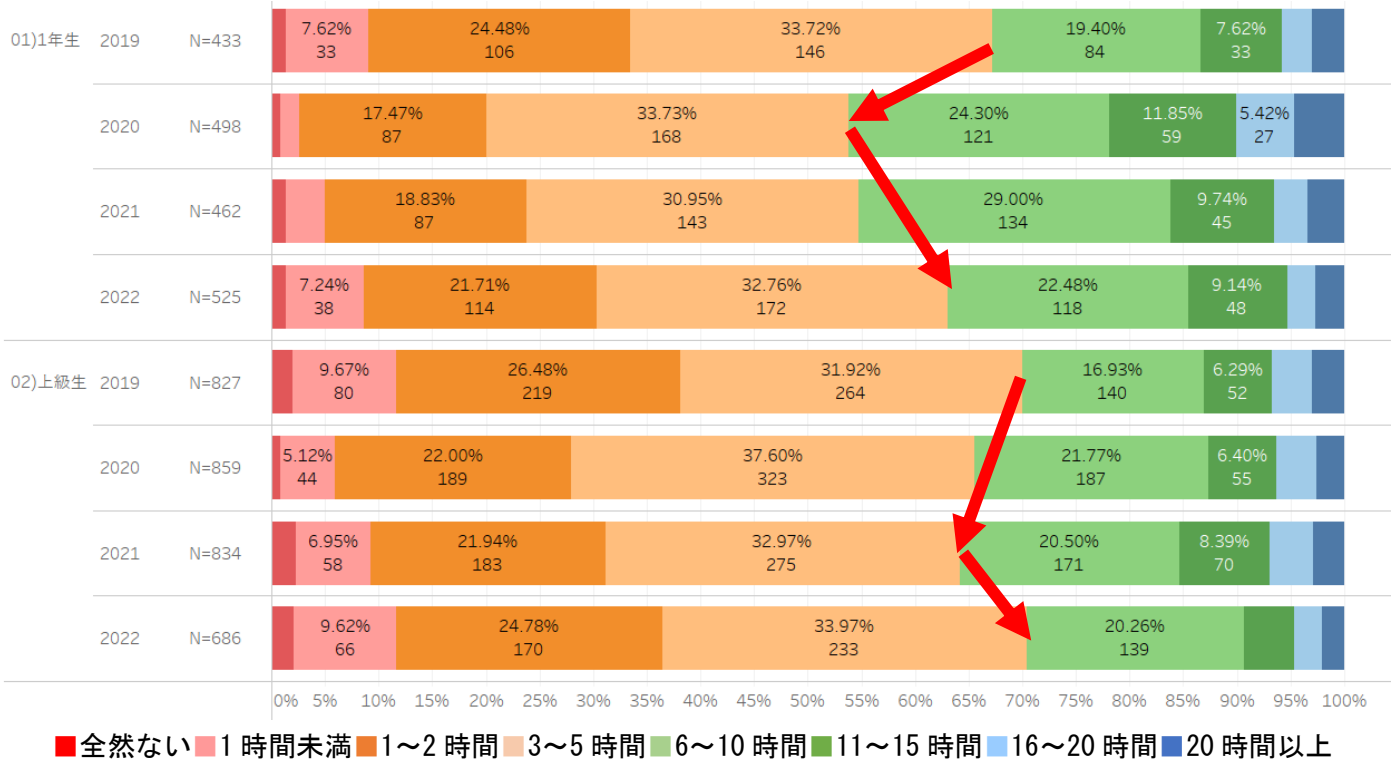
学習態度：教員に親近感を感じた

⇒1 年生は 2020 年から 2022 年にかけて増加傾向。上級生も 2021 年から 2022 年が増加。



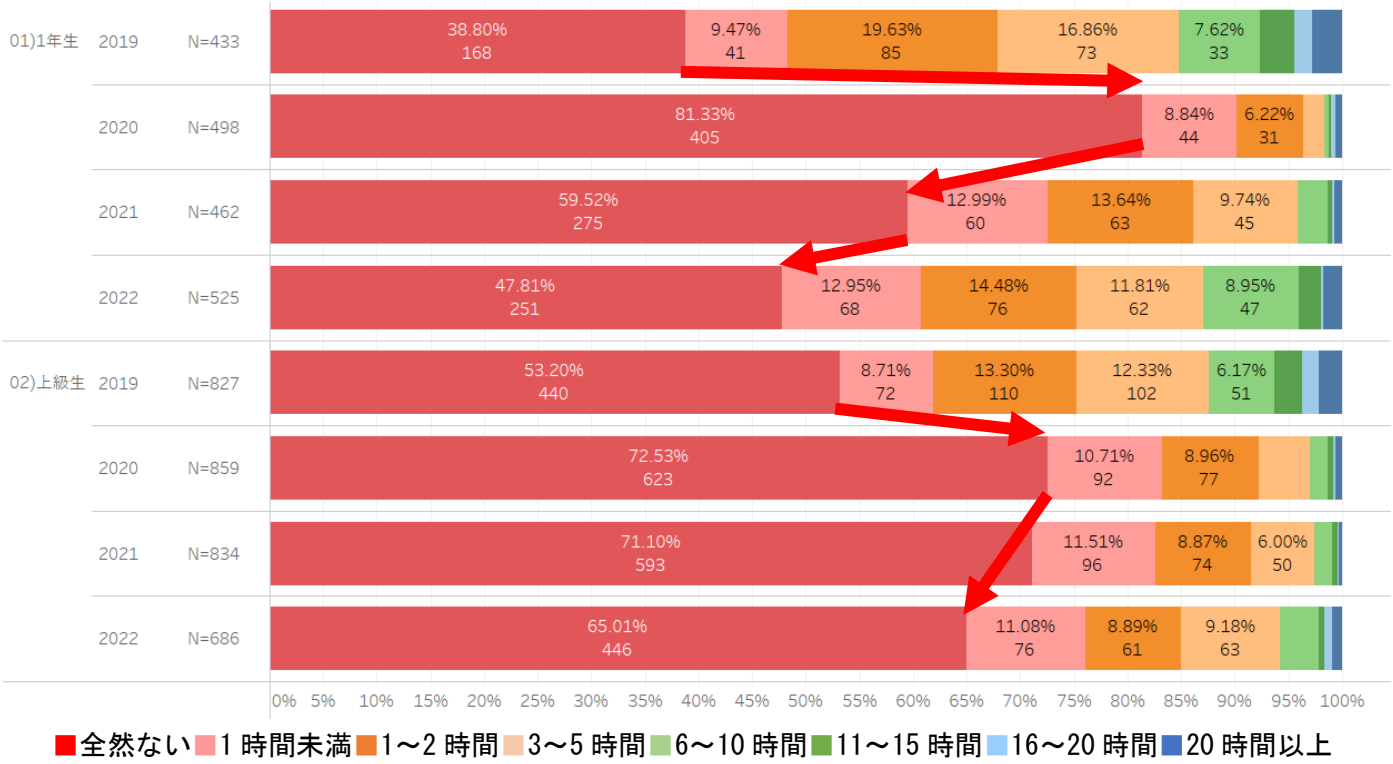
週あたりの活動時間：授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする

⇒授業時間外学習は減少傾向にあるが、ほぼコロナ禍以前の水準に戻ってきている。



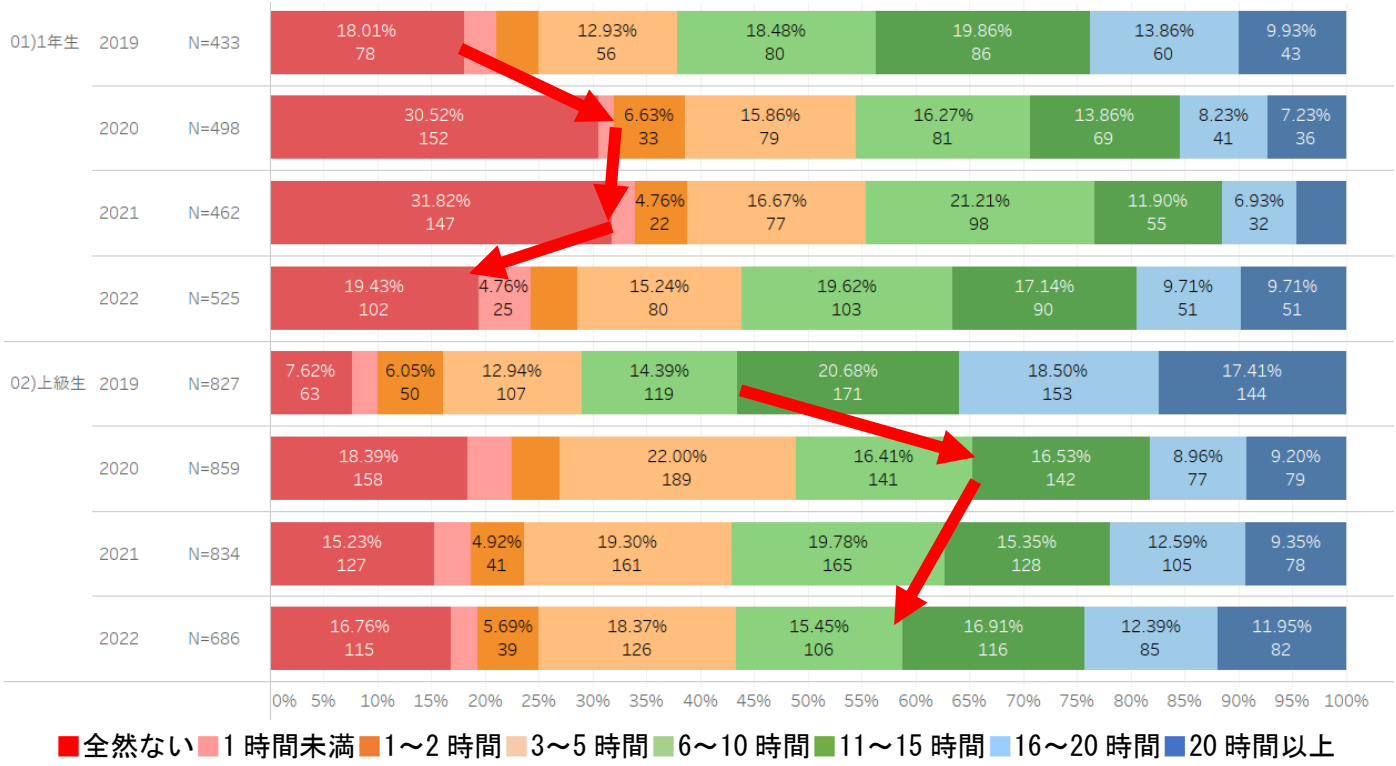
週あたりの活動時間：部活動や同好会に参加する

⇒2019 年から 2020 年は大幅に減少。コロナ禍後の 2020 年から 2022 年は回復傾向にあるが、コロナ禍以前の水準には戻っていない。



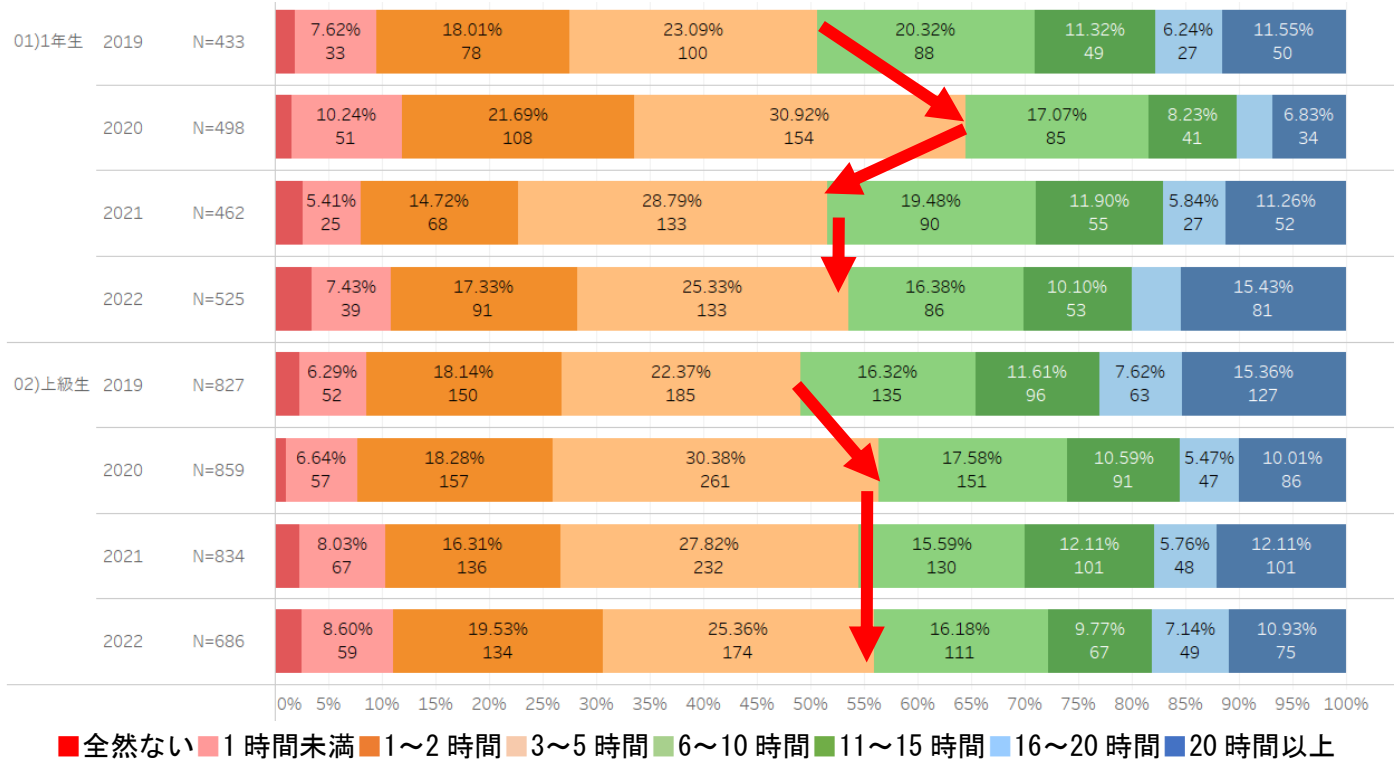
週あたりの活動時間：大学外でアルバイトや仕事をする

⇒1 年生はコロナ禍以前の水準にかなり近づいている。上級生はコロナ禍以前に戻りつつある。



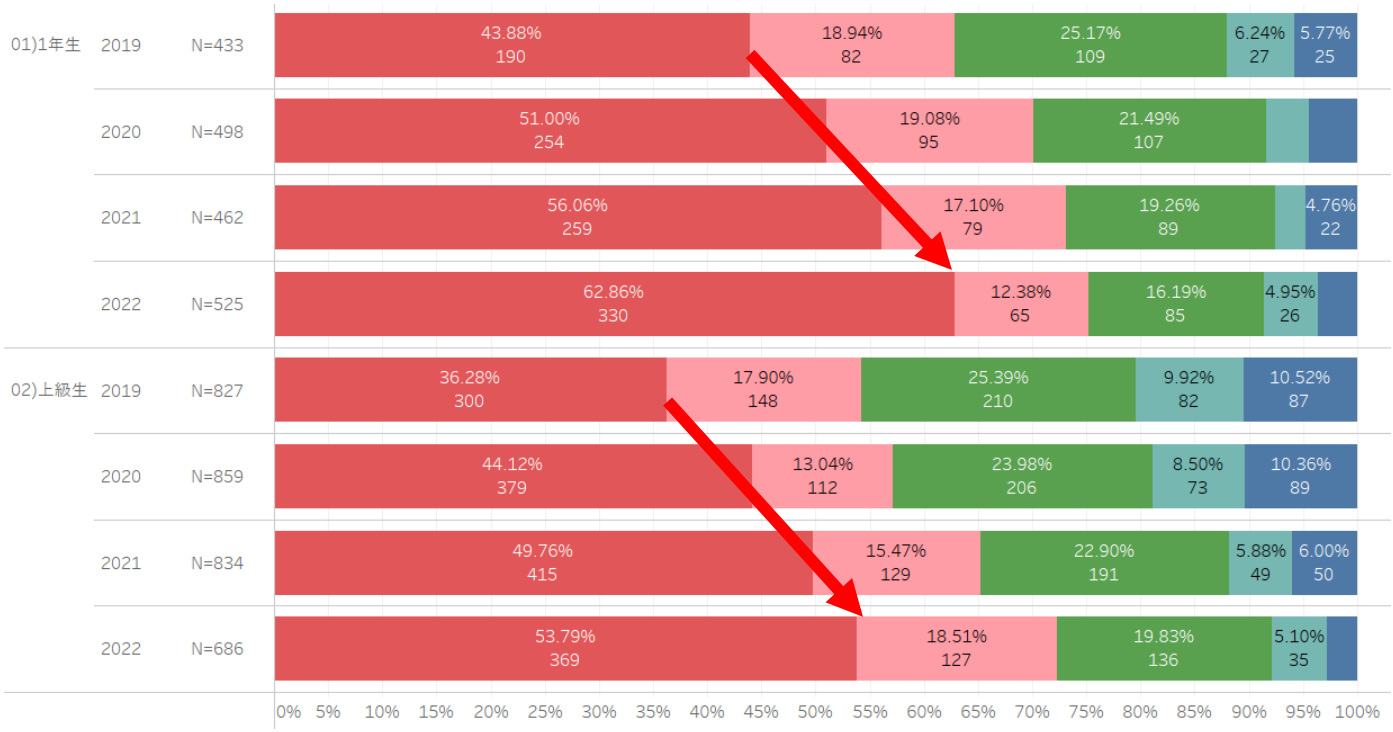
週あたりの活動時間：個人的な趣味活動をする（テレビやゲーム、映画鑑賞など）

⇒1 年生はコロナ前に戻ってきた。上級生についてはコロナ後も同じ傾向。



渡航経験

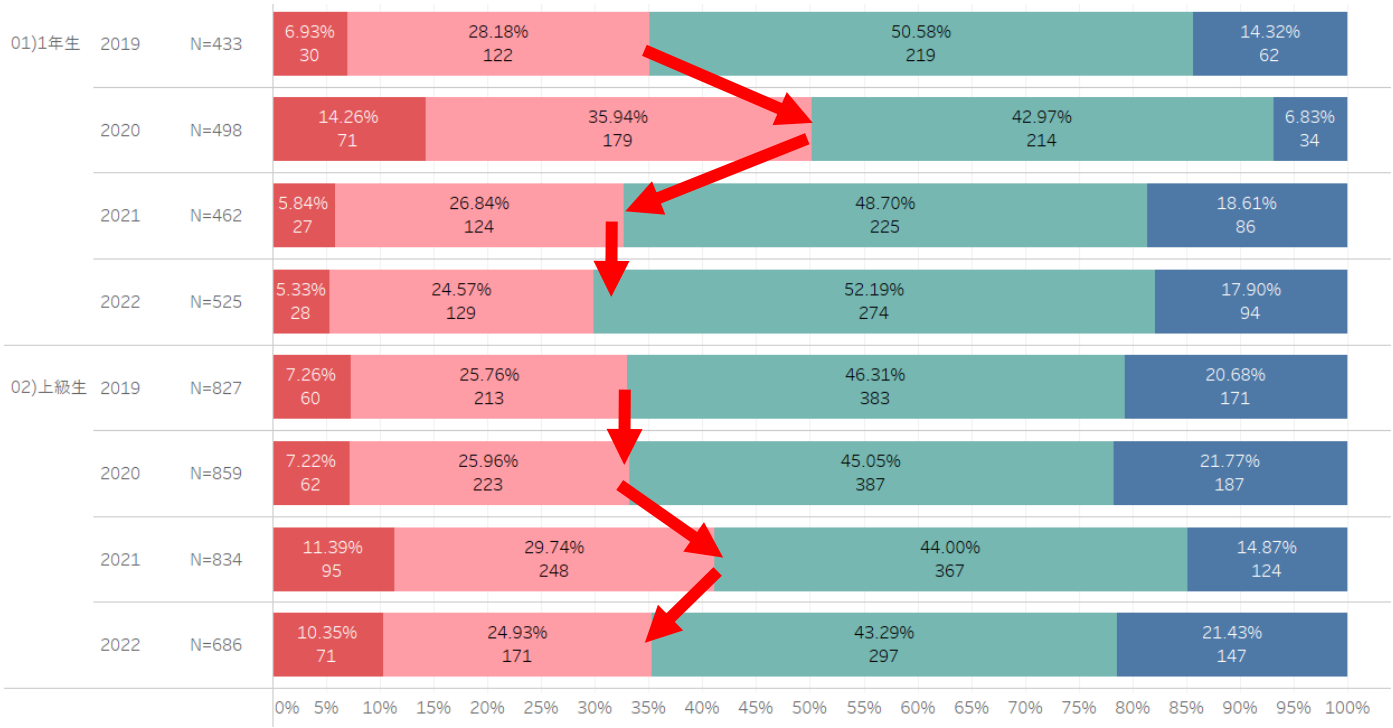
⇒渡航経験について「まったくない」と回答した学生が約 2 割増加。



■渡航したことはない ■10 日未満 ■10 日以上 1 ヵ月未満 ■1 ヵ月以上 6 ヵ月未満 ■6 か月以上

大学生活への適応：大学教員と顔見知りになる

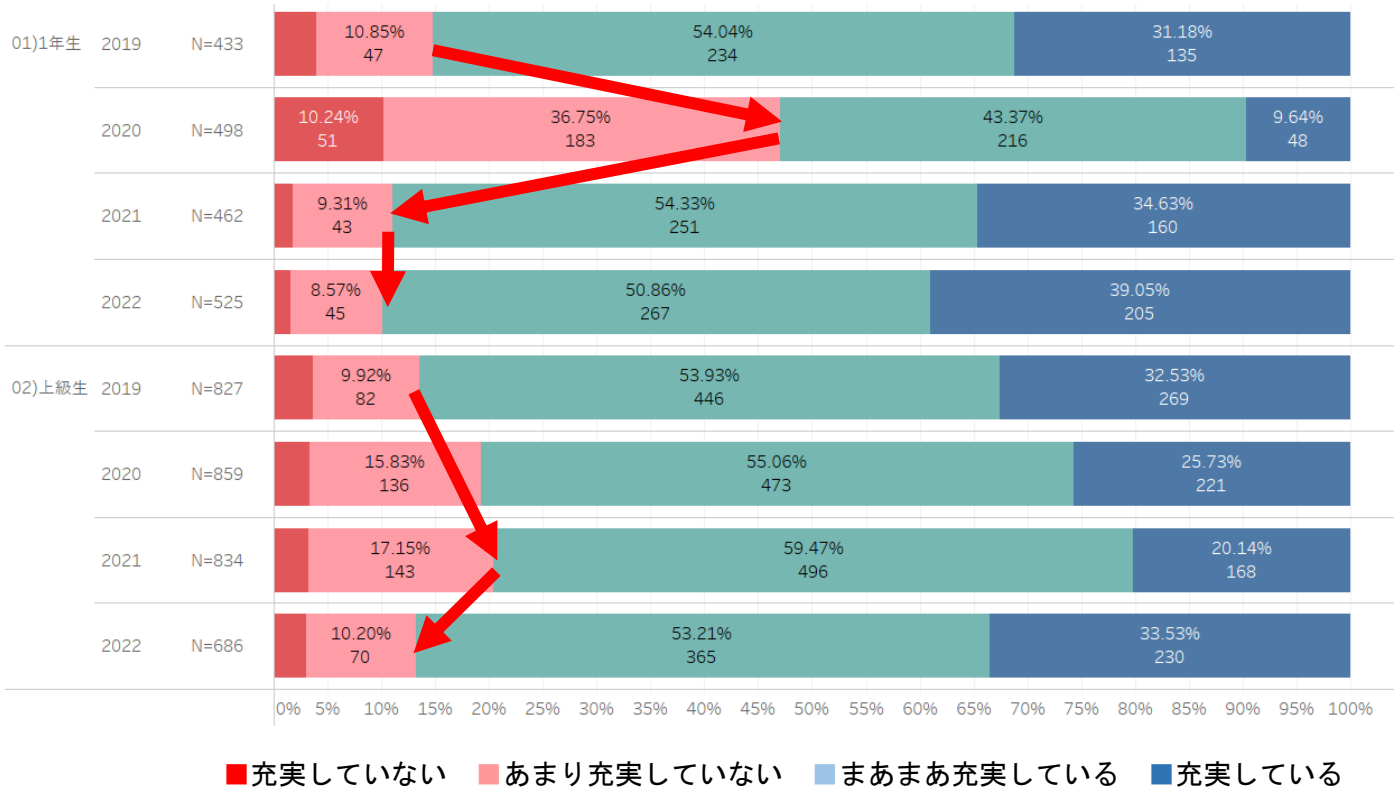
⇒コロナ禍以前の水準に回復し、7 割近くが教員と顔見知りになったと感じている。



■まったくうまくいかなかった ■あまりうまくいかなかった ■いくらかうまくいった ■とてもうまくいった

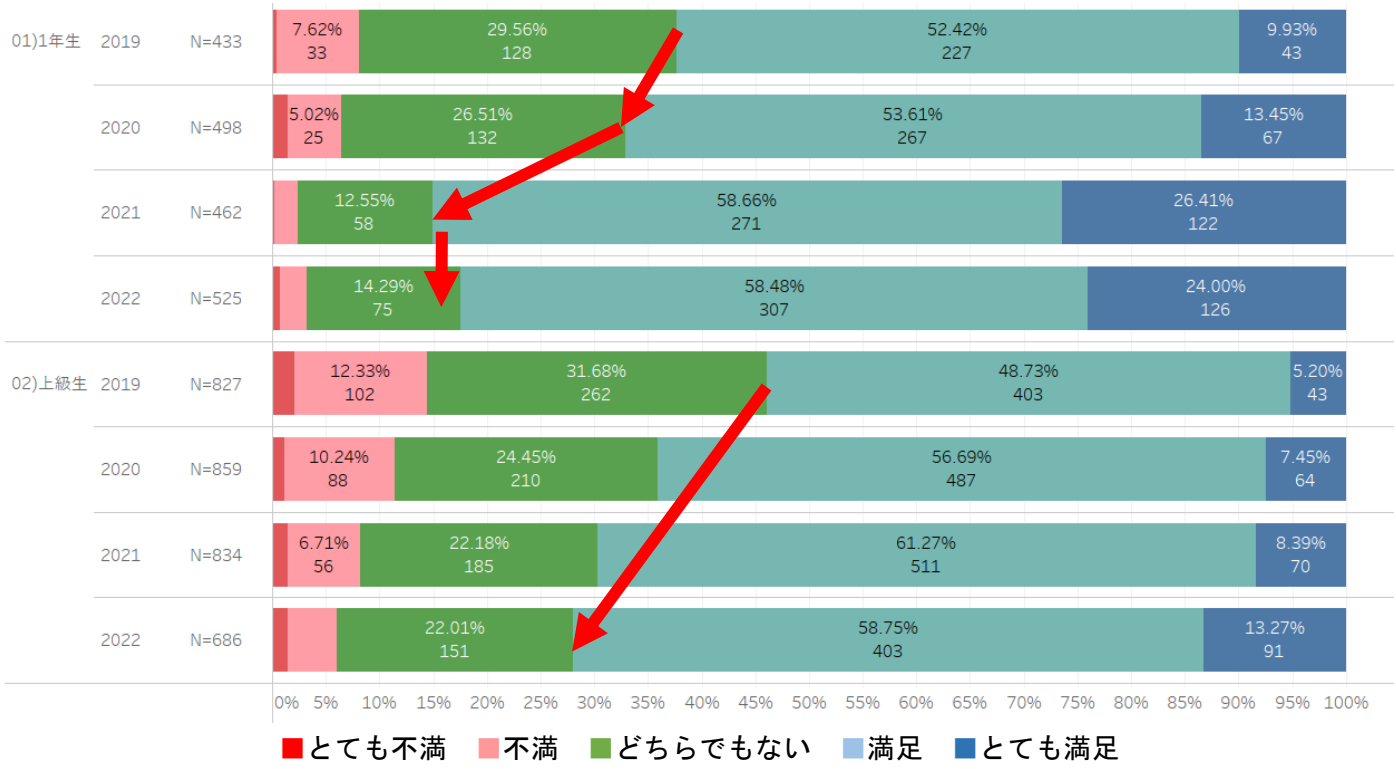
学生生活の充実度

⇒1 年生は V 字回復し、上級生も回復傾向。9 割前後が充実している、まあまあ充実していると回答。



大学教育への満足度：授業の全体的な質

⇒1 年生は 2020 年から 2021 年にかけて、とても満足、満足が約 18%増加。上級生も 2019 年から 2022 年にかけて約 18%増加。上級生は 4 年間増加傾向。

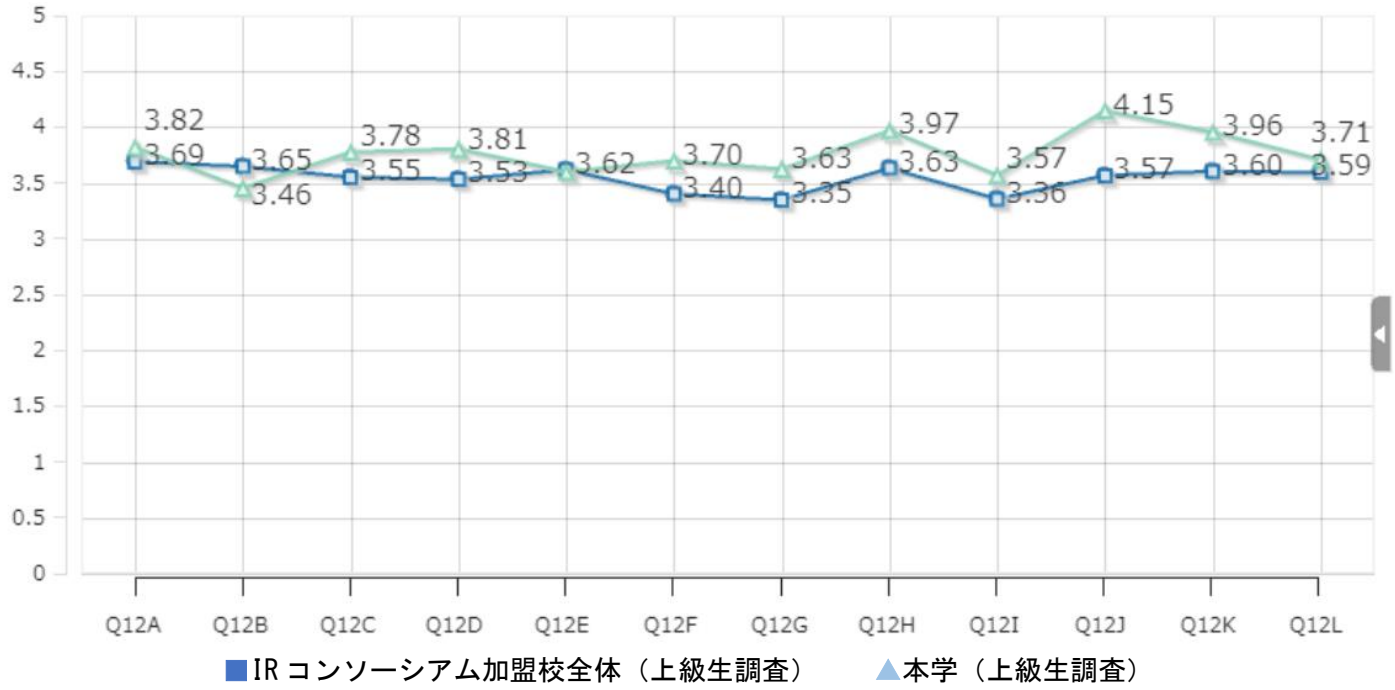


大学教育への満足度：大学 IR コンソーシアム全体平均との比較（上級生：2～4 年生）

Q12. あなたは、本学の教育内容・環境にどれくらい満足していますか。

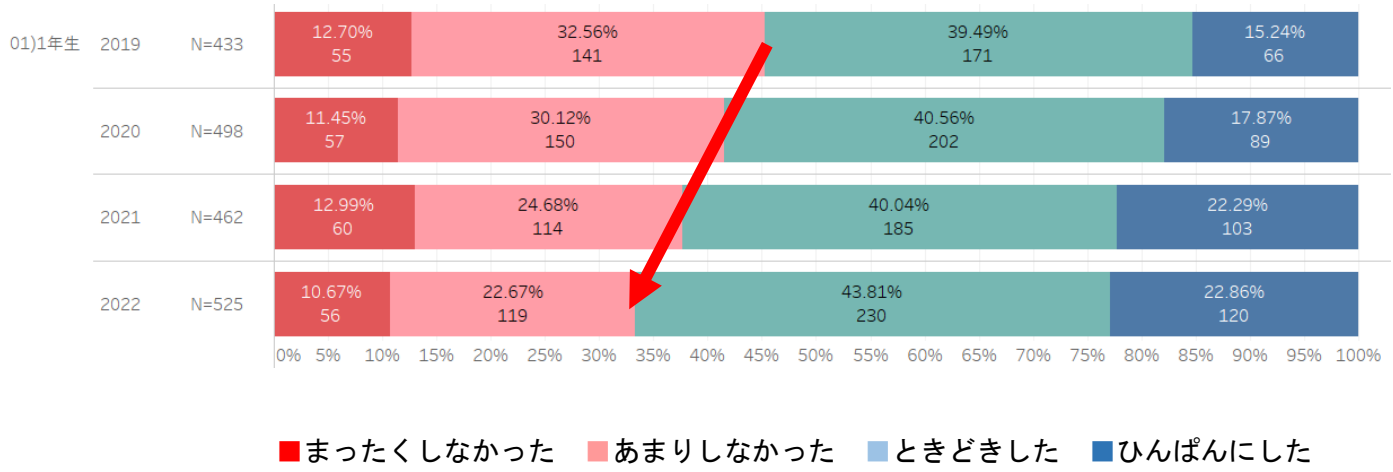
⇒「Ｊ．多様な考え方を認め合う雰囲気」、「Ｈ．他の学生と話をする機会」、「Ｋ．大学での経験全般」など全般的に、大学 IR コンソーシアム（上級生調査）の全体平均スコアより、高い値となっている。

Ａ．[上級生]専門教育あるいは所属学科の授業
Ｂ．[上級生]2 年次生または 3 年次生を対象としたゼミ（演習）などの教育内容※
（※加盟校の中で、ゼミ・演習などの未履修者は、どちらでもないを回答していると推定）
Ｃ．授業の全体的な質
Ｄ．日常生活と授業内容との関連
Ｅ．将来の仕事と授業内容の結びつき
Ｆ．教員と話をする機会
Ｇ．学習支援や個別の学習指導
Ｈ．他の学生と話をする機会
Ｉ．大学のなかでの学生同士の一体感
Ｊ．多様な考え方を認め合う雰囲気
Ｋ．大学での経験全般について
Ｌ．１つの授業を履修する学生数



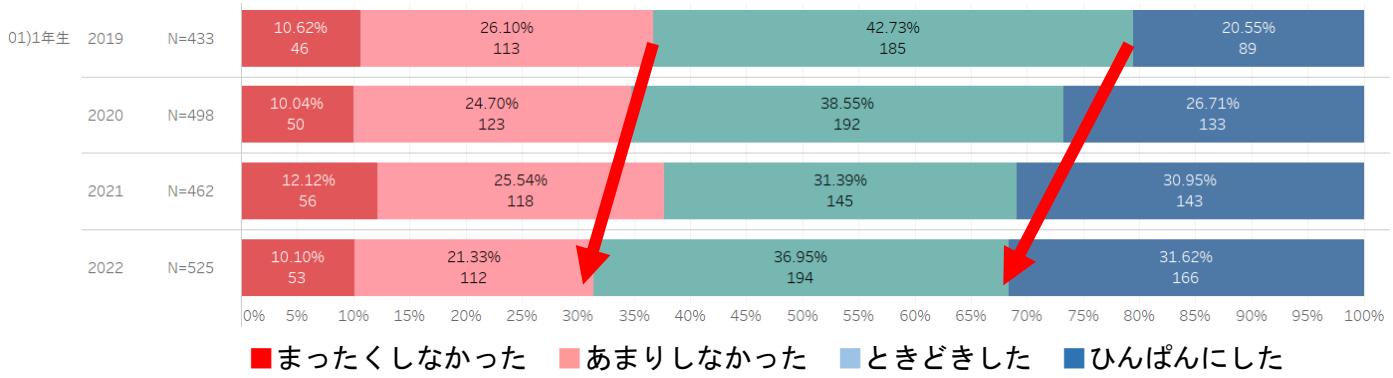
高校 3 年次の学習経験：インターネット上の情報が事実かどうか確認した。

⇒過去 4 年間で、ひんぱんにした、ときどきしたが増加傾向。



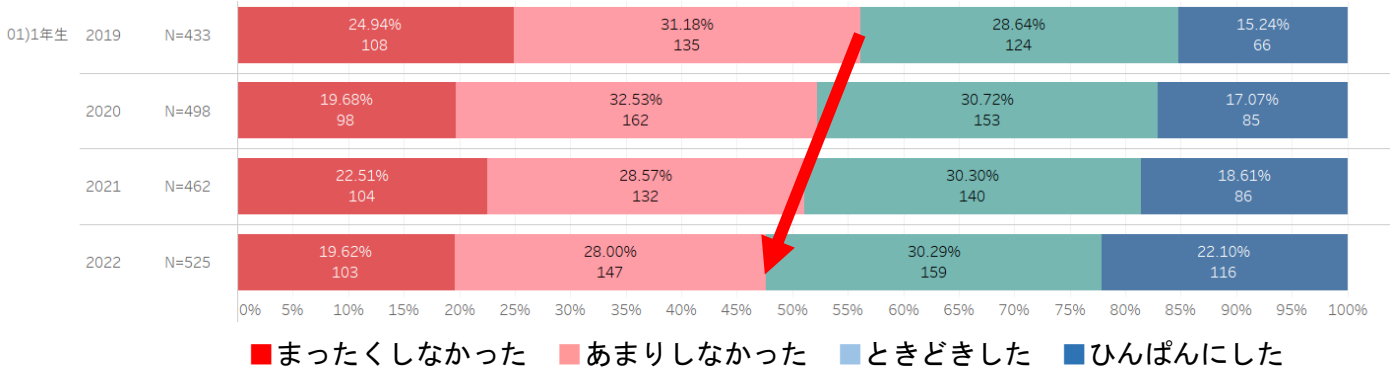
高校 3 年次の学習経験：授業以外に興味のあることを自分で勉強した

⇒過去 4 年間で、ひんぱんにした、ときどきしたが少しずつ増えてきている。



高校 3 年時の学習経験：読書をした（マンガ・雑誌を除く）

⇒過去 4 年間で、ひんぱんにした、ときどきしたが増加傾向。



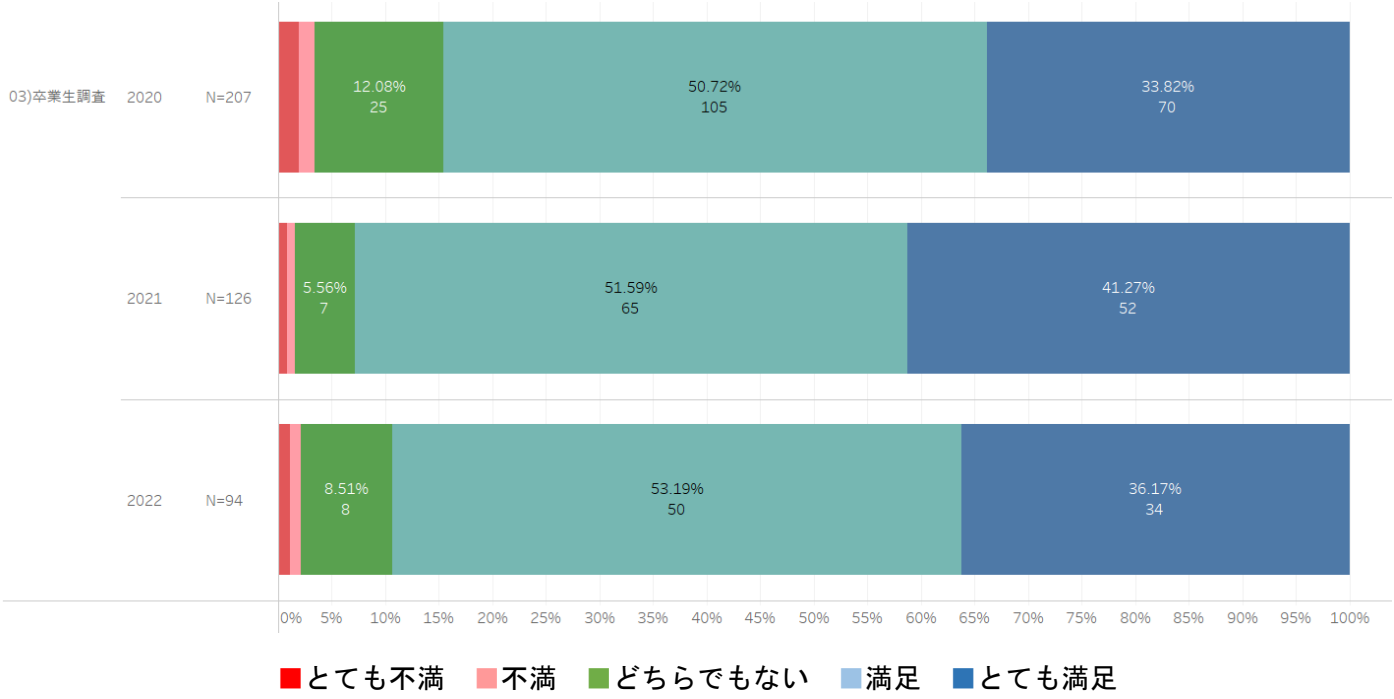
卒業生アンケート集計結果　－2022 年度－（抜粋）

●本学における卒業生アンケート実施状況

期　　間　：2022 年 12 月 1 日（木）～2023 年 2 月 24 日（金）
対　　象　：卒業生
有効回答数　：94 件（2021 度 126 件、2020 年度 207 件）
調査方法　　：グーグルフォームを利用した Web アンケート
回答所要時間：約 5 分
内　　容：IR コンソーシアム共通、満足度（教育・研究／学生生活）、大学卒業後の仕事について、社会で求められる能力など。

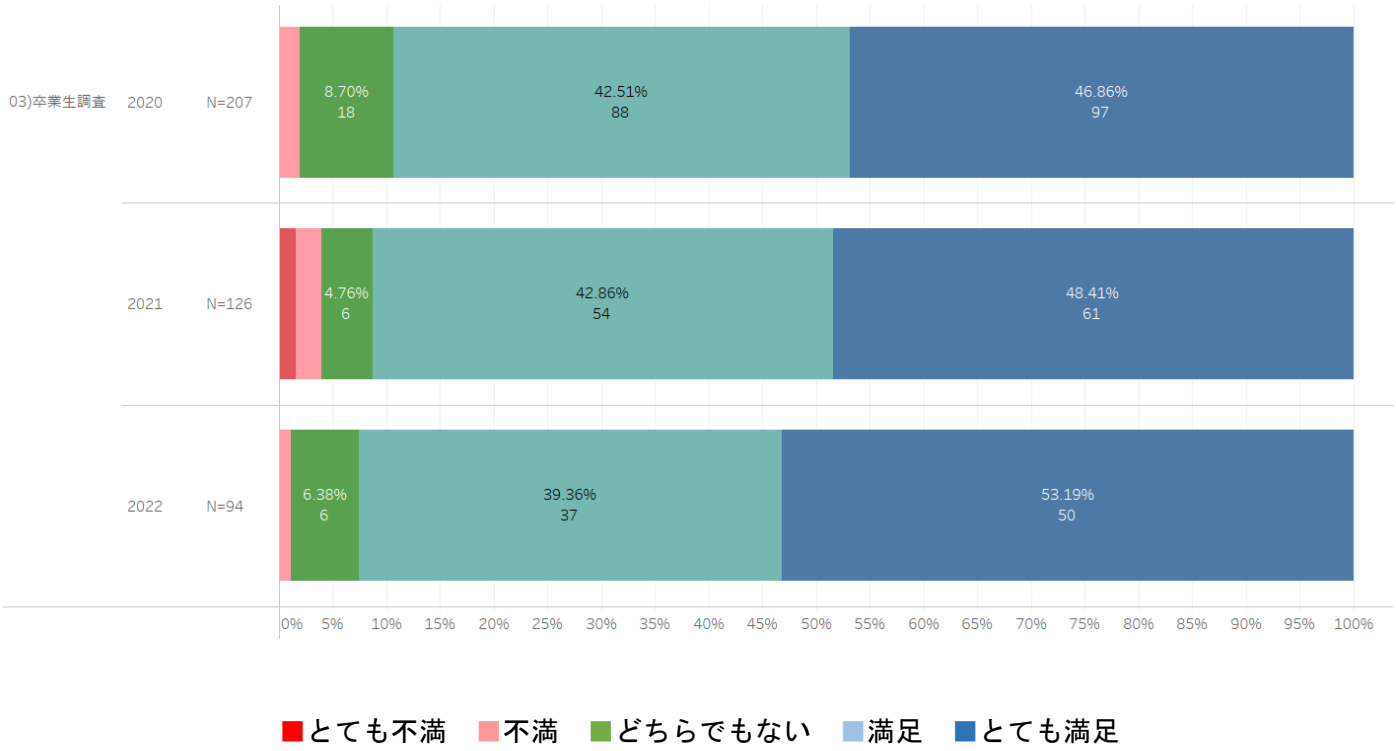
教育・研究の満足度

⇒約 9 割が満足（とても満足＋満足）



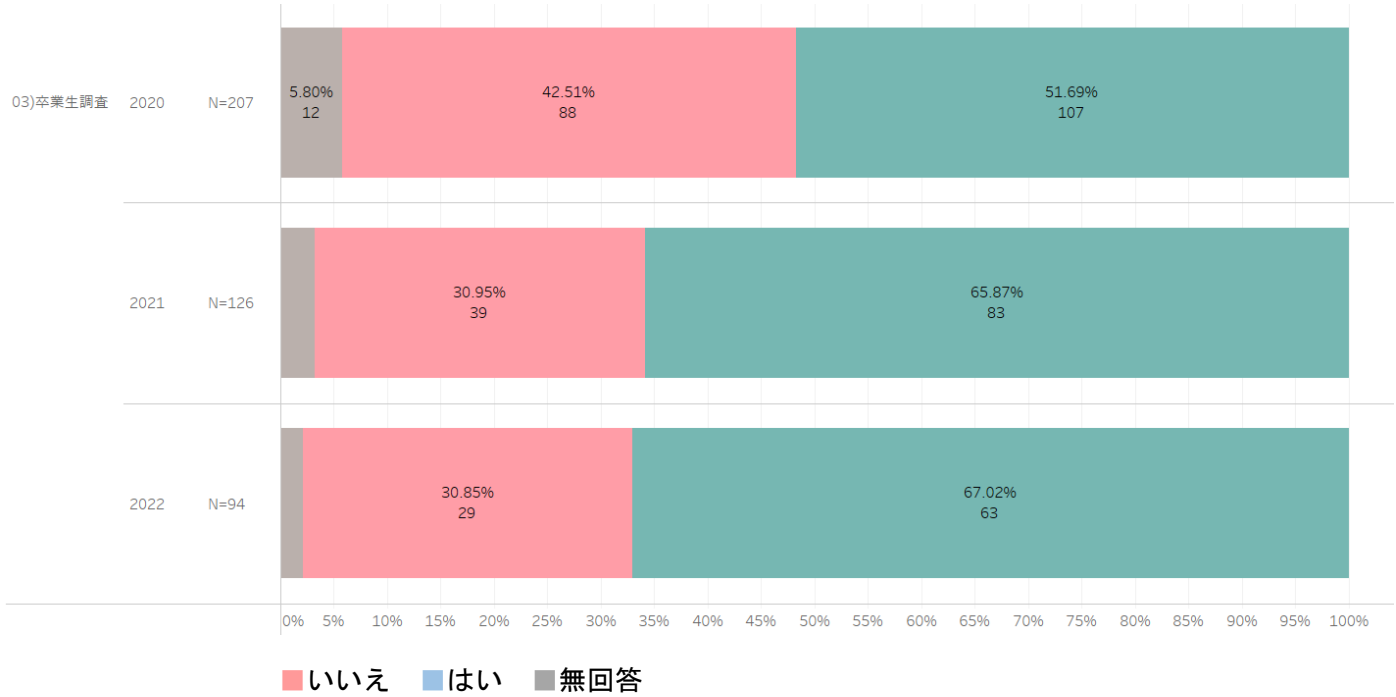
生活全般の満足度

⇒約 9 割が満足（とても満足＋満足）



外国語を使用して、会話や議論をする必要がある

⇒約６割が外国語を使用して、会話や議論をする必要がある



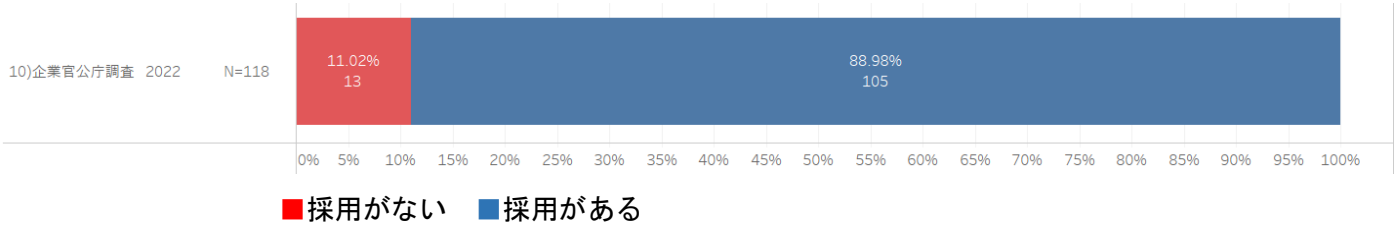
企業アンケート集計結果　－2023 年 2 月－（抜粋）

●企業アンケートの実施状況

期　　間　：2023 年 2 月 1 日（水）～2023 年 3 月 1 日（水）
対　　象　：本学の会社説明会などに参加する企業
有効回答数　：118 件
調査方法　　：グーグルフォームを利用した Web アンケート
回答所要時間：約 8 分
内　　容：本学の会社説明会に参加する企業にアンケート調査を実施。

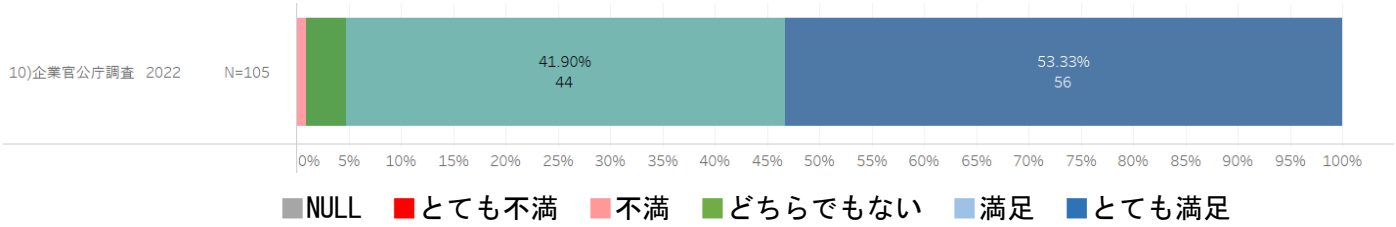
（本学の会社説明会に参加した企業のうち）過去に神田外語大学の学生を採用したことはありますか

⇒約 9 割が採用



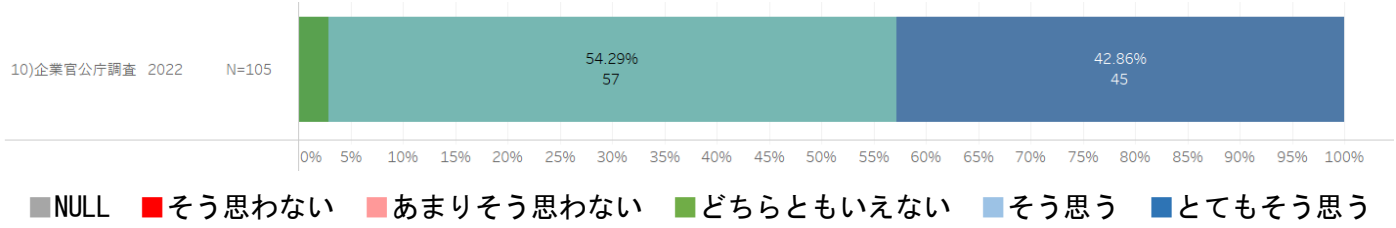
過去に採用した神田外語大学の学生にどのくらい満足していますか

⇒とても満足、満足が 95%前後



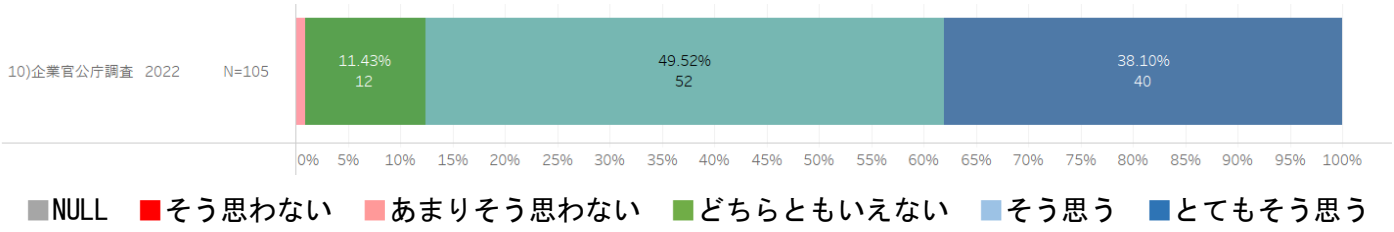
身についていると思う能力：コミュニケーションの能力

⇒とてもそう思う、そう思うが 97%前後



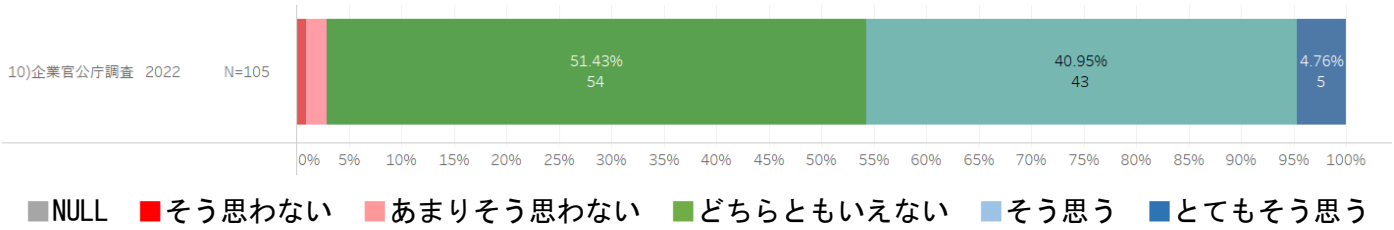
身についていると思う能力：外国語の運用能力（英語）

⇒とてもそう思う、そう思うが 88%前後



身についていると思う能力：データの運用能力

⇒とてもそう思う、そう思うが約 46%



過去に採用した神田外語大学の学生の印象

⇒自由記述に回答のあった 57 社の文章より、名詞では真面目、コミュニケーション、形容詞では明るいなどの単語が多く見られた。

名詞	スコア	出現頻度
印象	11.57	23
真面目	2.48	10
学生	1.61	7
コミュニケーション能力	19.83	6
コミュニケーション	3.57	5
業務	1.50	4
仕事	0.04	4
活発	2.49	3
物事	1.81	3
積極的	1.33	3
人物	0.95	3
自ら	0.73	3
素直	0.33	3
積極性	5.96	2
実直	5.84	2

形容詞	スコア	出現頻度
多い	0.84	17
高い	0.84	12
明るい	2.28	8
強い	0.04	3
良い	0.01	3
優しい	0.04	2
大人しい	0.05	1
大きい	0.01	1
うまい	0.01	1
欲しい	0.00	1
よい	0.00	1

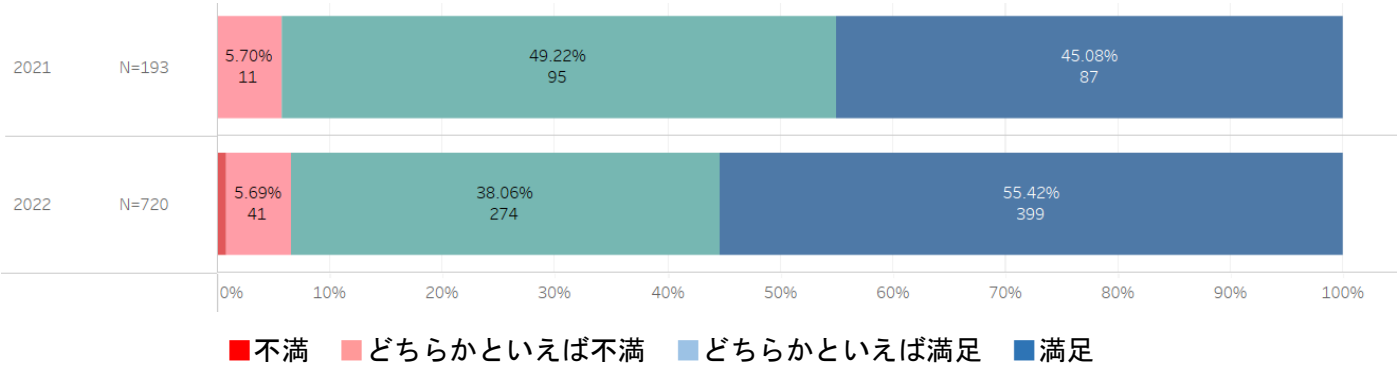
卒業時アンケート集計結果　－2023 年 3 月－（抜粋）

●本学における卒業時アンケート実施状況

期　　間　：2023 年 3 月 16 日（木）～2023 年 3 月 31 日（金）
対　　象　：学部の卒業時学生
有効回答数　：720 件　回答率 77.2%（2021 年度は、193 件　18.8%）
調査方法　　：グーグルフォームを利用した Web アンケート
回答所要時間：約 5 分
内　　容：ちば産学官連携プラットフォーム共通の項目に、卒業時の満足度等に本学独自項目を追加。

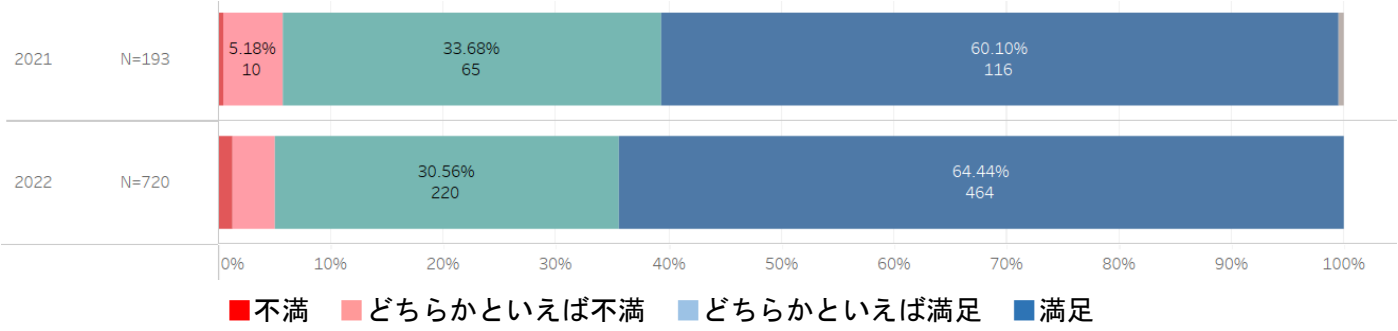
授業に関する満足度

⇒とても満足＋満足は9%前後。とても満足は増加傾向。



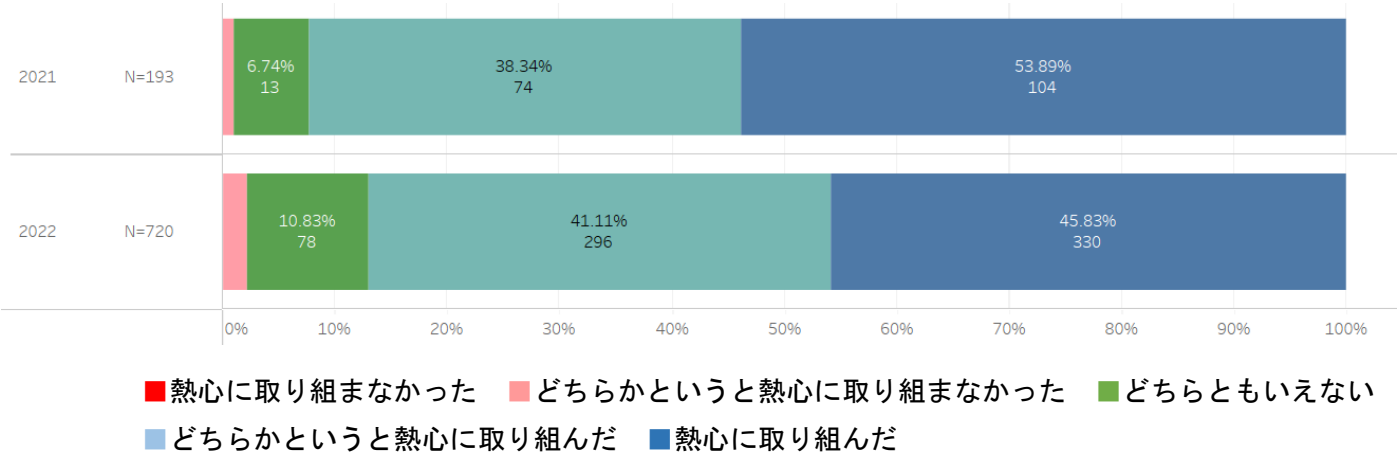
学内施設の満足度

⇒とても満足＋満足は 90%強。指標が 2021 年度に変更になったたが満足の増加傾向が読み取れる。



大学で力を入れたこと：大学の勉強（授業とその予習・復習・課題を含む）

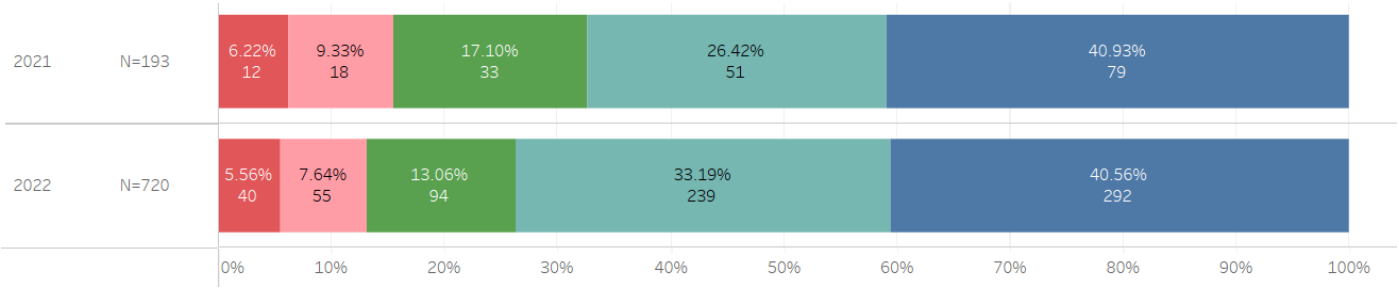
⇒85%前後が熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ＋どちらかというと熱心に取り組んだ）



大学で力を入れたこと：就職活動

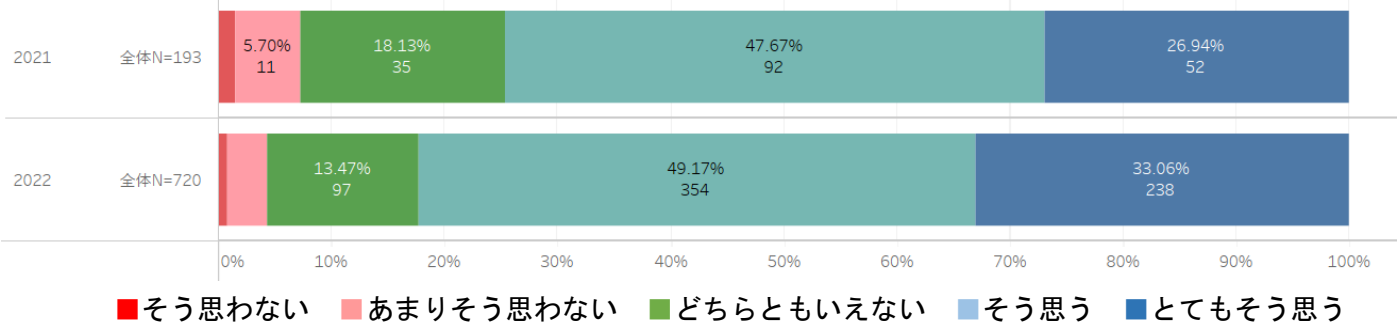
⇒66～70%が熱心に取り組んだ（熱心に取り組んだ＋どちらかというと熱心に取り組んだ）

増加傾向。



知り合いへの推奨度

⇒そう思う＋非常にそう思うは80%程度で増加傾向。

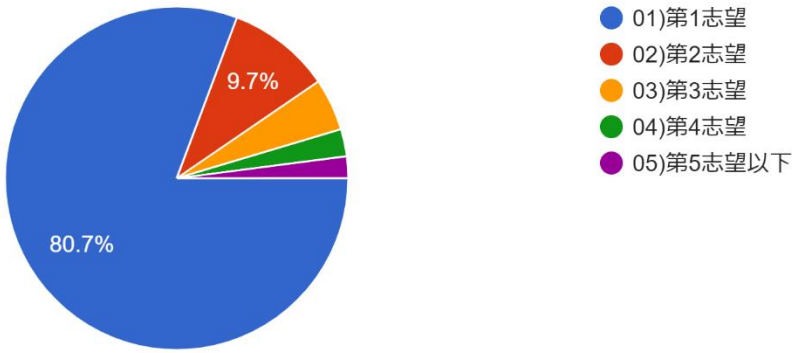


新入生アンケート集計結果　－2023 年度－（抜粋）

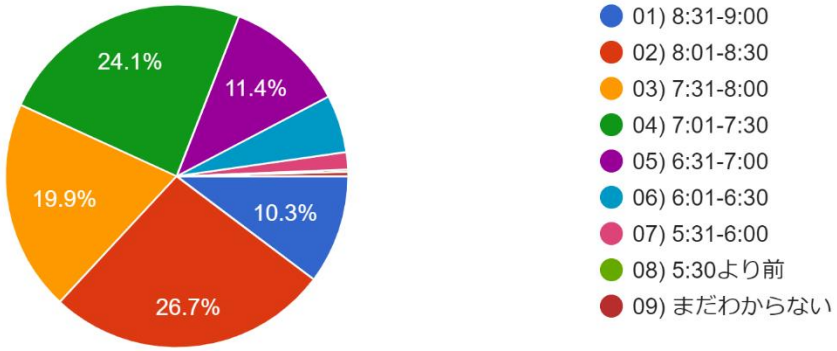
●本学における新入生アンケート実施状況

期　　間：2023 年 3 月 31 日（金）～2023 年 4 月 14 日（金）
対　　象：学部の新 1 年生（981 名）
回　　答　　数：975 件、有効回答数　963 件　回答率　98.2%
調　査　方　法：グーグルフォームを利用した Web アンケート
回答所要時間　：約 15 分
内　　容：入学時の学習や生活の状況を調査。

神田外語大学の志望順位を教えてください。
975 件の回答

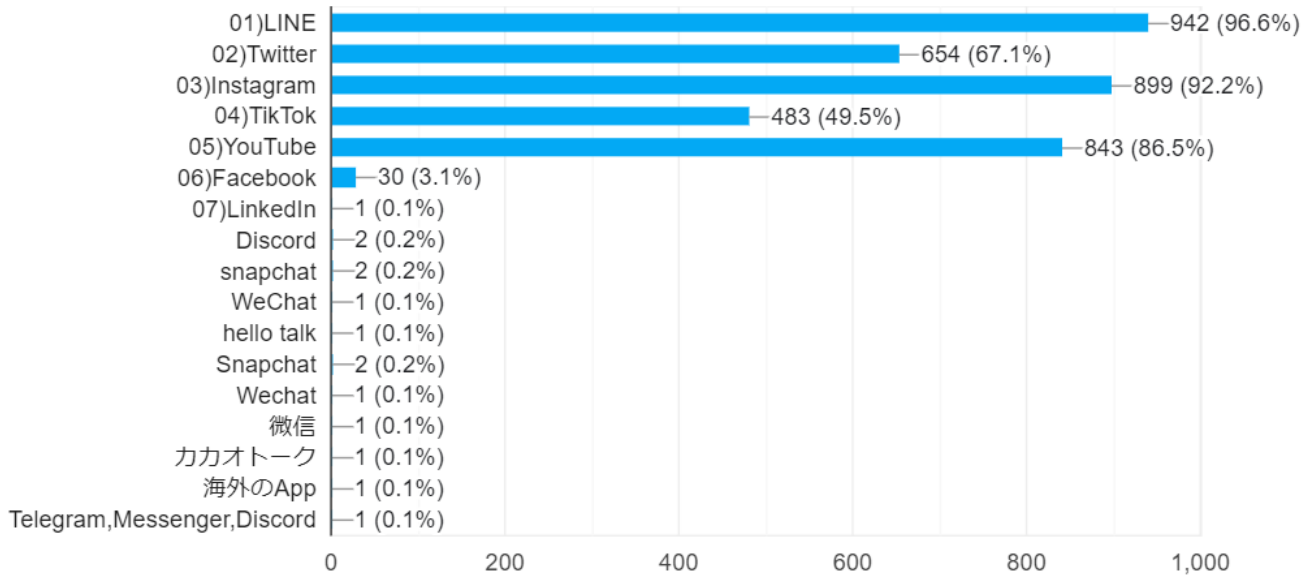


1時限目の対面授業（9:00開始）に出席する場合…時刻を教えてください。（大体の時間で結構です）
975 件の回答

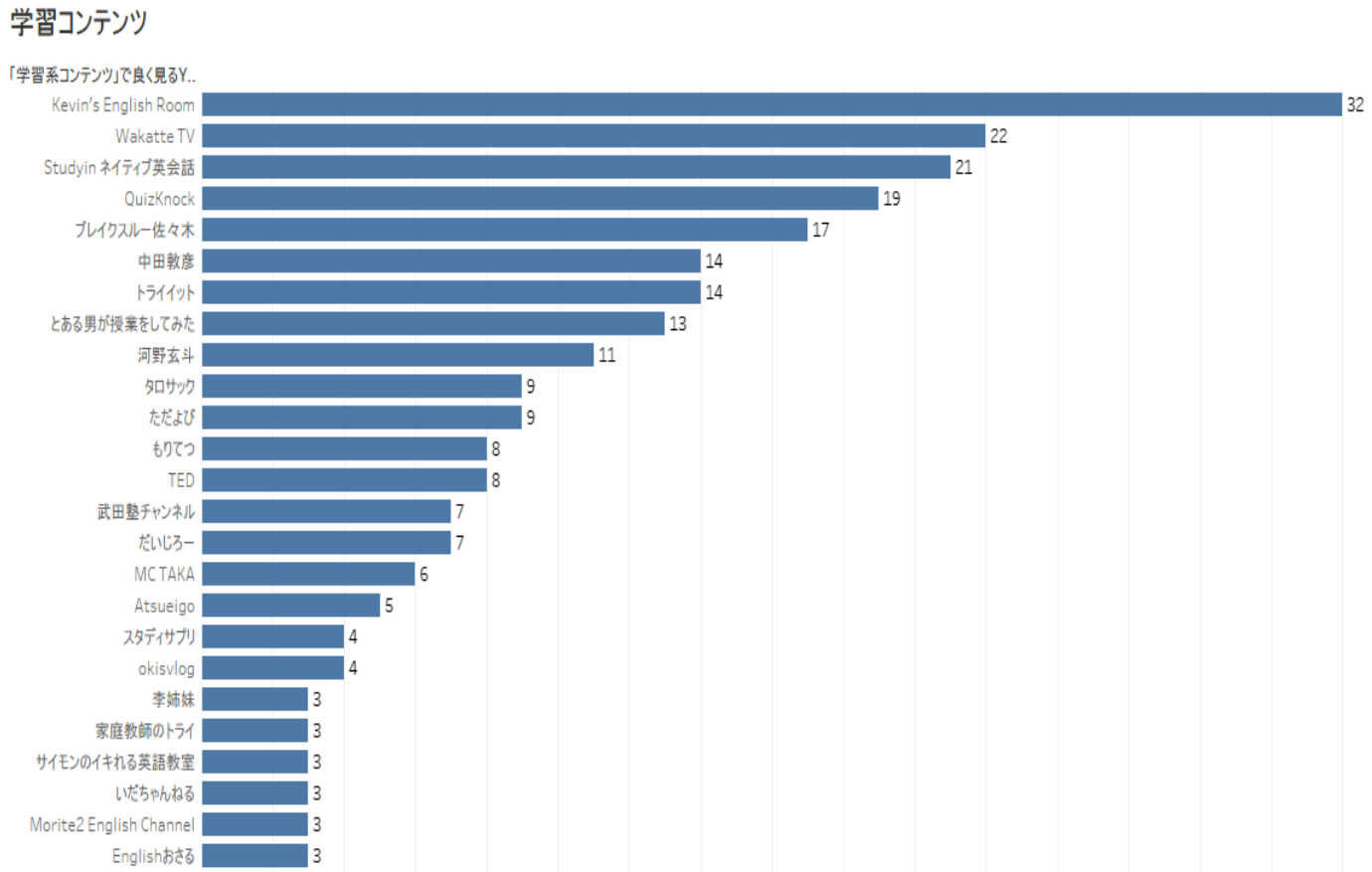


現在、日常的に使用しているSNSサービスを教えてください。（複数回答可）

975 件の回答



「学習系コンテンツ」で良く見る YouTube，TikTok，Instagram 等の名前やチャンネル名を教えてください。（複数回答可）



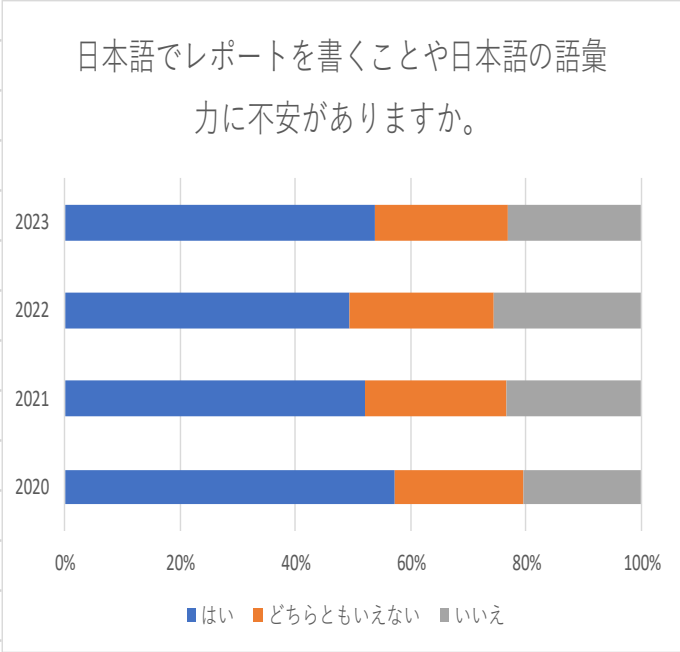
日本語でレポートを書くことや日本語の語彙力に不安がありますか。

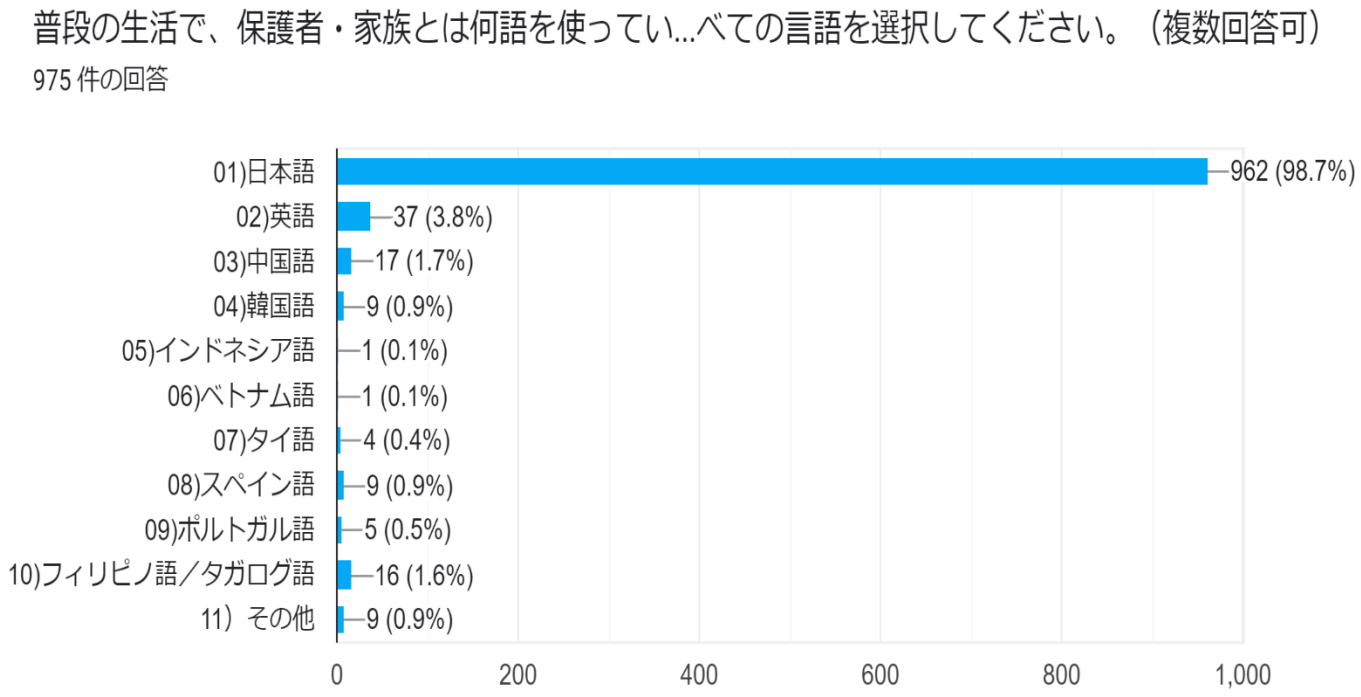
日本語でレポートを書くことや日本語の語彙力に不安がありますか。

	2020	2021	2022	2023
はい	120	489	450	524
どちらともいえない	47	230	226	225
いいえ	43	220	234	226
合計	210	939	910	975

日本語でレポートを書くことや日本語の語彙力に不安がありますか。

	2020	2021	2022	2023
はい	57%	52%	49%	54%
どちらともいえない	22%	24%	25%	23%
いいえ	20%	23%	26%	23%
合計	100%	100%	100%	100%





「THE 日本大学ランキング 2023」

私立大学で全国 13 位にランクイン、教育充実度は私大 3 位

総合ランキング

私立大学中 **13** 位

（全大学中47位タイ）

分野別ランキング

教育充実度（84.7point） 私立大学中 **3** 位

（全大学中5位）

イギリスの教育専門誌『タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE : Times Higher Education』が実施している、日本大学ランキングが、３月23日に発表されました。神田外語大学は、私立大学の中で総合全国13位（全体47位タイ）、そして「教育充実度」では全国3位（全体5位）となりました。

「教育充実度」全国 5 位（私大 3 位）

「THE 日本大学ランキング」は、THEとベネッセグループが、大学の教育環境や学生の学びの質、成長性を公表するランキングで、「教育リソース」「教育充実度」「教育成果」「国際性」の4分野によって、大学の教育力を測定します。

教育への期待がどれだけ実現されているかを表す「教育充実度」にて、本学は全国5位へと大きく躍進。国際基督教大（ICU）、国際教養大、立命館アジア太平洋大（APU）、一橋大（国立）に次ぐランクインとなり、私立大学では全国3位、東日本エリア私大では2位となりました。千葉県の大学では5年連続1位です。

評価教員との交流や協働学習機会の多さ、クリティカルシンキングを伸長する教育など、本学入学後の学びの充実度が高いスコアにつながっています。

順位	大学名	設置区分	スコア
1	国際基督教大学	**私立**	91.4
2	国際教養大学	公立	91.3
3	立命館アジア太平洋大学	**私立**	86.8
4	一橋大学	国立	85.1
5	**神田外語大学**	**私立**	**84.7**
6	東京工業大学	国立	84.5
7	東京大学	国立	84.2
8	東京外国語大学	国立	84.1
9	東北大学	国立	84.0
10	九州大学	国立	83.3

「THE 日本大学ランキング 2023」教育充実度ランキングより

大学情報・機関調査研究会（MJIR）発表要旨

大学情報・機関調査研究会（MJIR）研究集会において、本学のIR部門が発表しましたので、その要旨をここに掲載いたします。

大学情報・機関調査研究会 MJIR (Meeting on Japanese Institutional Research）とは

日本の高等教育機関および研究機関の自律的運営と、その発展に寄与する機関調査（Institutional Research）を推進・支援する研究会。2012年より活動を開始。IRの事例紹介や研究発表を通じて、日本におけるIRの推進に寄与するとともに、経営学や統計学、情報科学など、関連する分野の研究者や実務家および教育者の人的交流の促進とネットワーク形成を図っている。

第11回 大学情報・機関調査研究集会

2022年11月11日、12日、13日

会場:オンライン発表

神田外語大学における教学 IR ダッシュボードの企画・導入

― IR Dashboard、Data Lake、Excel、Tableau の活用 ―

Planning and Implementation of an Academic IR Dashboard at Kanda University of International Studies.

― Use of IR Dashboard, Data Lake, Excel, and Tableau ―

寺澤 岳生*(神田外語大学)

*terazawa@kanda.kuis.ac.jp

抄録

神田外語大学では、2020 年に学生アンケート分析基盤を構築し、2021 年には、本学の IR 部門の業務を整理した。その後、学内に散在しているデータを経年で蓄積する方法を検討し、教学 IR 分析基盤(データレイク)を構築した。本発表では、中規模大学における、データウェアハウスを導入しない費用を抑えた形で構築した教学 IR 分析基盤(データレイク)と連携する形での IR ダッシュボードの企画や導入についての経緯や実践手法について報告する。

キーワード: *大学 IR 分析基盤の設計, データレイク構造, データベース仕様書, IR ダッシュボード, IRQuA 可視化*

1. 本発表の目的と課題

本発表では、神田外語大学(私立大学、中規模、2 学部、学生数約 4,000 名)において、費用のかかる特注プログラムではなく、ベストプラクティスであり費用を抑えた形でのパッケージシステムを活用した神田外語大学 IR ダッシュボード(KID:KUIS IR Dashboard※)の企画から導入について報告する。※大阪大学 スチューデントライフサイクル・サポートセンター(旧 高等教育・入試研究開発センター)と VELC(ヴェルク)株式会社が開発した、本学も発売前の開発当初からテストユーザーとして参画していた IRQuA(イルカ)[1]を採用した。IRQuA の内部では、アマゾン ウェブ サービス ジャパン合同会社の Amazon QuickSight が稼働し可視化グラフを作成している。

大学における IR 活動では、必要なときに、必要な情報を必要な依頼者に提供するという役割があり、調査設計⇒情報収集⇒加工分析⇒報告レポートという流れがある[2]。

東京工業大学 IR 論講座の資料(図 1. IR 分析基盤の構成要素)より、大学 IR 分析基盤は、データを入手する ETL ツール(Extract Transform Load Tools)、データを蓄積する統合データベース(DWH:Data Ware House)、データを分析する分析ソフトウェア(Data Analytics Software)などの構築や運用が必要とされている[3]。

本学では、大学執行部の意思決定を支援することを目的とし、支援に必要な情報の収集・分析・提供・保管をするという役割を担うために、学内に散在している基データを集め、経年でデータを蓄積することや、学習成果などを可視化する機能を持った IR 分析基盤(図 2. データレイク方式による IR 分析基盤)を構築した[4]。

補足としては、本学では、学生数が 4,000 名前後の大学ということもあり、自学にとっては統合データベース(DWH)を購入することは難しかった。本学のような中小規模の大学では、大規模大学に比べ、学生数が少ないため、IR システムに掛けられる費用は限られており、学内に散在する教学 IR のデータをどのように収集、加工、蓄積していくかという部分で

苦慮したが、データレイク方式[5]で検討することで、2021 年には、比較的安価にこの問題を解決した。

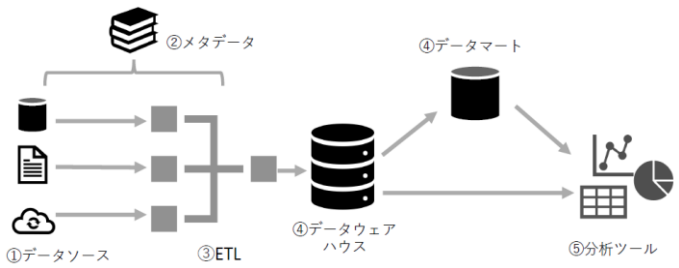


図 1. IR 分析基盤の構成要素

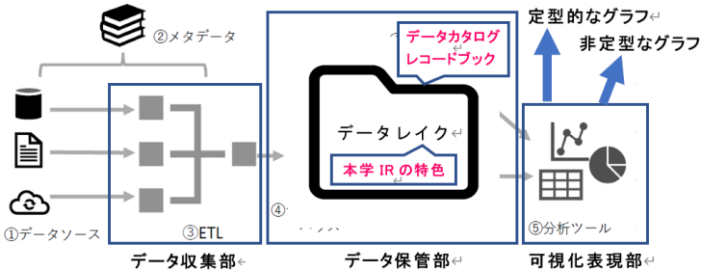


図 2. データレイク方式による IR 分析基盤

なお、データレイク方式には、下記の事項がある。

・要件 1:データが一箇所にまとまっていると便利であり、“単一の情報源”にできる。

・要件 2:データの保存時に、“慎重に設計する必要なく”保管管理できる。

統合データベース(DB)を構築では、整列させるデータ間の整合性を図る必要があるが、データレイクではデータの保存時に、“慎重に設計する必要なく”保管管理できるというメリットがある。一方、スタッフが手作業で積極的に自律的にデータレイク内を整頓しないと、データの湖が濁るデータ沼地(Data Swamp)になり、データを、すぐに探せない状態になるというデメリットもある。そして、データ沼地状態を防ぐためには、データカタログ(目録要覧)[6]を作り、手で、メンテナンス(データ湖を清浄に)することが大事で、安価な方式だが、維持管理には日々の時間と手間がかかる。(今のところ、1 年に 1～2 回のデータ取得で済んでいるため、DWH を構築しなくても、やりくりできている。)

教学 IR 分析では、定型的なグラフと非定型なグラフの 2 種類の可視化レポート業務があり、非定型なグラフは、スポット的な分析の依頼に対応するため IR スタッフが Tableau を使い都度手作業で対応している(DP 達成度と英語能力やスコアのクロス集計など横持ちのデータ)。定型的なグラフについては、現状で毎年、同じようなデータを扱っているが、手作業で更新しており時間が掛かっている状況である。本発表のタイトルのとおり、この繰り返しの作業をダッシュボードシステムで半自動化できれば、今まで掛けていた時間的なコストを他の業務や新規業務に割り当てることができるようになる。

大規模大学では、データウェアハウスや統合データベースを構築しているケースや、Tableau サーバにより自前で IR ダッシュボードを開発しているケースがあるが、本学では、中規模大学ということもありパッケージで且つ一般の事務系スタッフにも引き継ぎ易いことから本学では IRQuA を採用した。

そこで、神田外語大学としては、運営費用が安く、難しくなく運用できる、「IR ダッシュボード・“パッケージ”・システム」を企画し導入することにした。2021 年春の時点で、日本国内においては、未だ IR ダッシュボードのパッケージソフトは希少な存在であったが、本学としては、企業用のダッシュボードシステムを大学に転用するのではなく、大学 IR 用として発売される前のダッシュボードパッケージ IRQuA に着目し導入を検討した。

今回の発表は、安価にパッケージを活用し大学事務職員であれば運営できる形で IR ダッシュボードシステムを企画、導入する際の手法や実際の事例について報告する。

2. 神田外語大学の教学 IR 部門

神田外語大学は、千葉県千葉市にある学生数約 4,000 名(女子:男子≒7:3)の中規模の私立大学で、1987 年に開学し今年で 35 年目になり、現在は、2 学部 5 学科 9 専攻の体制である。「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という建学の精神に基づき、国際社会の一員として世界に貢献する意欲と能力を持つ人材の育成に取り組んでいる。

下記の 2.1 と 2.2 は、資料[4]を参照。

2.1. IR 部門の概要

2.2. IR 推進チームの業務内容

3. 神田外語大学における教学 IR ダッシュボードの企画と導入

大学の IR ダッシュボードでは、学生数や収容定員、教員数やその年齢構成などをグラフィカルに表示する機能が必要である。用途としては、その一部を大学公式ホームページにリンクし、学外からでも見ることができるようにしている大学も存在している。前述のように IR 部門は、執行部の意思決定を支援することを目的としているため、神田外語大学の教学 IR ダッシュボードは、主に IR 部門や執行部で情報共有するための機能で企画、検討をした。

3. 1. 準備（データセット、前処理）について

今回契約した IR ダッシュボードは、パッケージであるため、大学側で事前に、データセットを、先方のソフトの取り込み方法に合わせた形で作成しておく必要がある。本学では、データ量が多く縦持ち（リスト型）データである基幹教務システム内のデータを使うことにした。（教務システムメーカーに依頼し、夜間バッチの SQL プログラムを作成しダウンロードデータを取得している。年 1～2 回、フローズンデータとして保管している。）

前述のとおり、本学の IR 部門は、中規模大学であり、IR スタッフは 2 名であるが実質的には 1. 6FTE 前後であるので、多数行のレコードを 1 つ 1 つ確認して前処理をしていくことは難しく、IR ダッシュボードのメーカーに、ダッシュボードの利用契約以外に、大学のデータ列を整形して、ダッシュボードシステムに投入するところまでの作業を合わせて依頼した。

繰り返しになるが、本学は、ETL ツールには費用をかける方針にしているので、前述のように、基幹教務システムのメーカーには、教学データをダウンロードするための夜間バッチ外付けプログラムの作成を依頼している、また、IR ダッシュボードのメーカーには、データレイク内のデータを IR ダッシュボードに入力できるかたちに整形するための外付けプログラムの作成を依頼している。

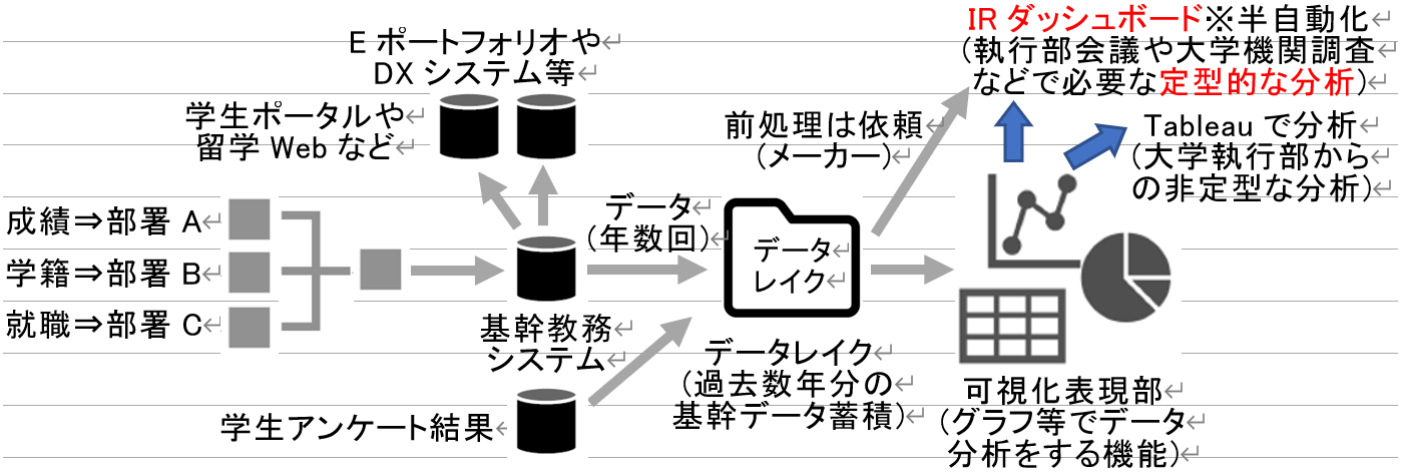


図 4. パッケージ導入による IR ダッシュボードの構成

大学側では、夜間バッチでダウンロードする教学データの ER 図やデータベース仕様書を整備し、また、IR ダッシュボードに設定するための定員や教員の所属などのマスター定義書を作成し、IR ダッシュボードメーカーに渡した。（教養教育の教員をどのように割り振るか、専任教員をどのようにカウントするかなどのマスター定義の検討が必要であった。）
また、夜間バッチでダウンロードする教学データには、1 行目に項目名（カラム名）を付与することが大切だと実感した。本学では当初、カラム名を付けずにデータを取り溜めていたため、2 年分であるが、大学側で付与し直すことが必要となった。最初から夜間バッチの SQL 外付けプログラムの 1 行目に項目名（カラム名）を付与する機能を設定すべきであった。

補足としては、注文契約をする前に、学内の情報部門とセキュリティ関係について相談しておき、また、メーカーとは秘密保持契約書（NDA：Non-disclosure agreement）の内容を調整した。データのやり取りについては、Excel データと圧縮したフォルダの 2 つにパスワードを掛け、大学が契約しているクラウドサービス上にアクセス制限を掛けて、教学データをアップロードし、メーカーによるダウンロードが完了したら、すぐに、クラウドドライブ上からはデータを削除するという内容で対応した。

3. 2. 導入について

執行部の意思決定を支援することを目的としているため、利用者は、動き始めたばかりということもあり、副学長、教員 2 名、職員 2 名としている。大学の出口のグローバル IP アドレスでアクセス制限をしているため、学外からはアクセスできない仕組みにしている。

2021 年 11 月に発注し、準備や導入、テスト作業を経て、2022 年 5 月より利用を開始した。クラウドパッケージシステムであるので、準備の段階で全作業の 7 割は完了していた。

3. 3. 活用について

IR ダッシュボードを導入したことで、毎年かなり時間が掛かっていた作業が半自動化できた。また、パッケージソフトであるので、自学で特注するより費用を安く契約することができた。そして、準備（多数のデータ整形）の部分を外付けプログラム（Tableau Prep）としてメーカーに依頼したことで、ここでも手作業を減らすことができた。全ての作業を外出しできた訳ではなく、マスター定義書の作成は大学側で作業した。

IR ダッシュボードでは、在学生数、収容定員、収容率、ST 比、GPA、入試区分別グラフ（図 5、6）などを表示することができ、執行部からの依頼に基づいて手作業で分析していたころに比べると、データ提供するスピードが早くなった。さかのぼっての退学や急な教職員の入退職などもある為、事務局の持っている最新の情報と若干の差異はあるが、執行部の意思決定の参考データとして使う目的のため大きな問題とはなっていない。

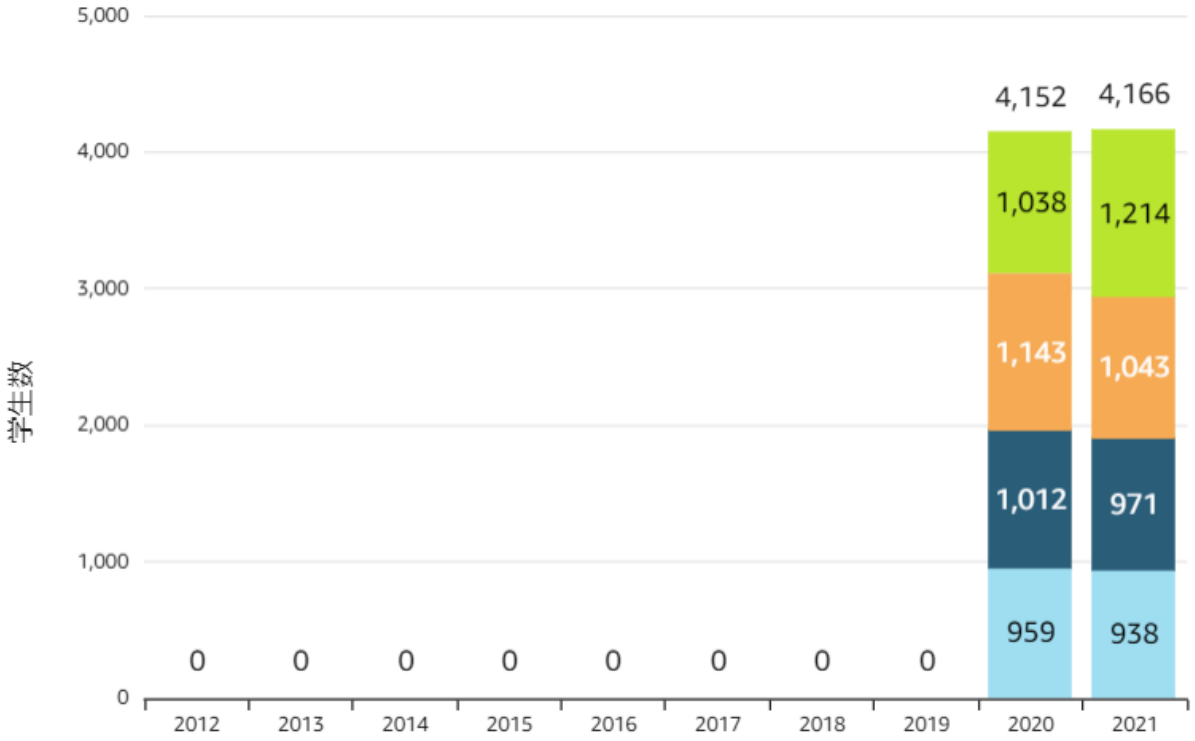


図 5. IR ダッシュボードの画面①

今回の論文で特に強調したい部分（新規の部分、工夫した点）は下記の通りである。

・新規の部分：神田外語大学の IR ダッシュボード KID には、2022 年 4 月に新発売の IRQuA パッケージシステムを採用し、安価に、サーバ構築よりは手軽に導入した。

・工夫した点：神田外語大学のデータレイクと連動させた点、ER 図、仕様書、マスター定義書、フローズンデータ（スナップショット）等の事前準備、実際の導入時の取り組み。

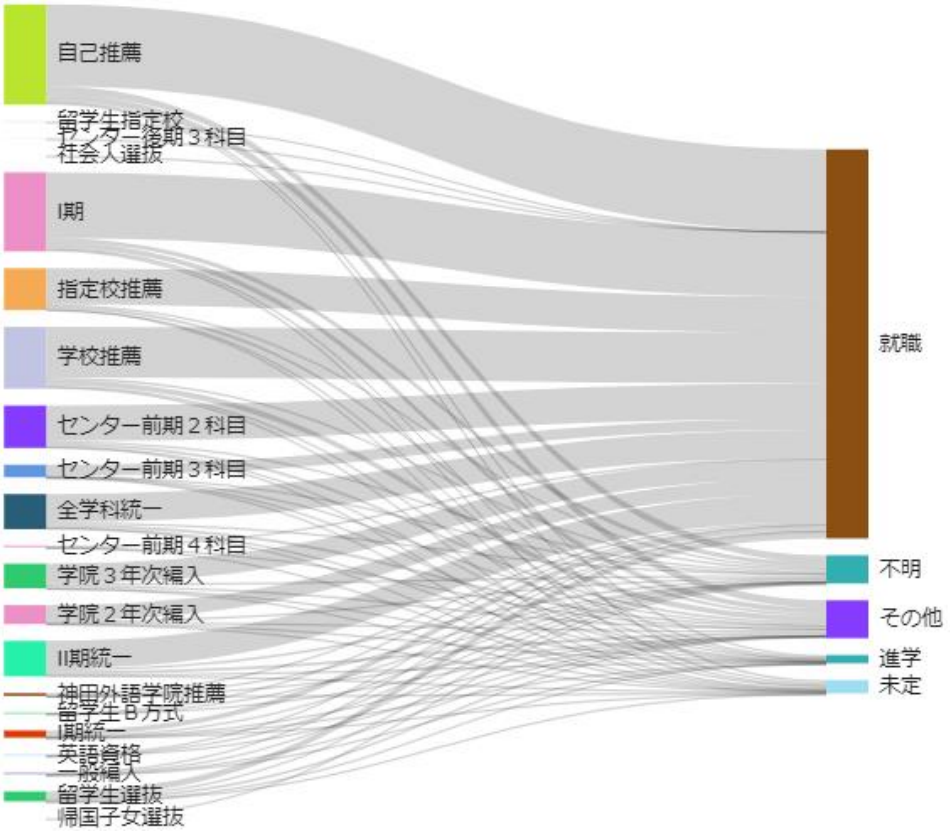


図 6. IR ダッシュボードの画面②

4. おわりに

今回の発表では、中規模大学の教学 IR ダッシュボードの企画から導入までの一連の流れを比較的安価に容易に実現できるように、そのフェーズごとに気をつけている点を実践報告した。また、セミナーでも具体的に語られることが少ないデータの前処理やメーカーとのやり取りなどで気をつけている点も情報共有した。

参考文献

[1] 和嶋 雄一郎, ″大学の IR 業務にクラウドを使うと何ができるのか？ － Amazon QuickSight を活用した半自動教学ダッシュボード、Azure AutoML と Tableau の連係によるプレ分析の半自動化 －″, 2021. https://iri-lab.org/research-list/

[2] 藤原 宏司, 浅野 茂, 山形大学 ″IR 実践プログラム″, 2021.

[3] 森 雅生, 大石 哲也, 東京工業大学 ″Institutional Research 論″, 2020.

[4] 寺澤 岳生, ″神田外語大学における教学 IR 分析基盤の設計・一部構築 ― Data Lake、Excel、Tableau の活用 ―″, 第 10 回大学情報・機関調査研究集会 MJIR, 2021.

[5] アマゾンウェブサービスジャパン株式会社, ″データレイクとは″, 2022, アクセス日 2022-10-03 https://aws.amazon.com/jp/big-data/datalakes-and-analytics/what-is-a-data-lake/

[6] 嶌田 敏行, ″IR オフィスの設計と運用″, JAST IR 研修会, 2016.

学長室 IR 推進チーム主な活動記録（2022 年度）

※年間を通じて、大学執行部会議に、IR データを報告・提供しています。

４月 新入生アンケート実施（A&C 部、学長室で協働） 前年度卒業時アンケート結果集計・分析作業	１０月 大学執行部向け IR ダッシュボード説明会 学外発表：GPS-Academic ラボ設立シンポジウムで事例発表（寺澤） ファクトブック公開開始
５月 大学 IR コンソーシアム IRiS システムの前年 2021 年度「学生情報データ」（5 月）登録作業 IR コンソーシアム　選挙管理委員(村田) THE 世界大学ランキング結果分析ミーティング	１１月 在学生アンケート 2022 回答者プレゼント抽選 MJIR 発表（寺澤） 文部科学省全国学生調査（第３回試行）
６月 大学 IR コンソーシアム　定時正会員総会出席 前年度卒業生アンケート結果集計・分析作業 IR ダッシュボード IRQuA データ抽出作業 KUIS IR 分析基盤システム年度データ加工作業	１２月 卒業生アンケート調査 2022 実施
７月 THE 日本版学生アンケート実施（7/1～10/31） THE 世界大学ランキング日本版学内説明会実施 教職員対象学生アンケート報告会実施 学外発表：本質的 IR 人材育成カリキュラム策定に関する研究にて事例発表（寺澤） 学外発表：大学 IR ダッシュボードサービス「IRQuA(イルカ)」説明会にて事例発表（寺澤）	１月 次年度新入生アンケート A&C 部と検討 企業アンケート設計
８月 在学生アンケート準備作業 KUIS ファクトブック（電子版）データ更新作業 学外発表:SPOD フォーラムポスターセッション参加（村田・寺澤）	２月 企業アンケート実施 大学 IR コンソーシアム IRIS システム 2022 年度「共通調査データ」（2 月）登録作業
９月 全学教員連絡会で前年度アンケート結果抜粋報告 在学生アンケート調査 2022 実施（9/7～11/2） 私立大学等改革総合支援事業、教育の質に係る客観的指標（文科省）IR 関係データの一部分を作成 THE 世界大学ランキングデータ作成	３月 卒業時アンケート調査 2022 実施 新入生アンケート準備 THE 世界大学ランキング結果(速報)資料作成

学長室 IR 推進チーム主な活動記録（2022 年度）

執行部、学長、理事長への報告事項
- ◆ 4 月 13 日(水)、執行部会議、THE 日本版ランキング結果概要(寺澤、村田)
- ◆ 6 月 8 日(水)、執行部会議、THE 日本版ランキング分析結果(寺澤、村田)
- ◆ 9 月 21 日(水)、執行部会議、入試区分別英語スコア(村田)
- ◆10 月 5 日(水)、執行部会議、、神田外語大学 IR ダッシュボードシステム説明会告知(寺澤)
- ◆10 月 25 日(火)、執行部会議構成員、神田外語大学 IR ダッシュボードシステム説明会(寺澤、村田)
- ◆2 月上旬、理事長に報告、初めてのオープンバッジ発行を報告（KUIS グローバルアンバサダー35 名）
- ◆3 月上旬、学長より依頼、OpenAI 社 ChatGPT、Microsoft 社 Bing チャットの使い方を説明(寺澤)

学内への報告事項
- ◆7 月 6 日(水)、学内 IR 説明会、THE 日本版ランキング分析結果報告(学長室主催、進研アド)
- ◆7 月 20 日(水)、学内 IR 説明会、在学生アンケート 概要説明(寺澤、村田)
- ◆9 月 7 日(水)、全学教員連絡会、在学生アンケート ポイント説明(寺澤、村田)

学外への報告発表、コンサルティング
- ◆ 7 月 26 日（火)、本質的 IR 人材育成カリキュラム策定に向けたシンポジウム発表・科研費関連（寺澤）
- ◆ 7 月 13 日（水)、第 2 回大学 IR ダッシュボードサービス「IRQuA(イルカ)」説明会発表・VELC 株（寺澤）
- ◆10 月 26 日（水)、GPS-Academic ラボ設立記念シンポジウム発表・株ベネッセ i-キャリア株（寺澤）
- ◆11 月 11 日（金)、大学情報・機関調査研究会 MJIR、「神田外語大学における教学 IR ダッシュボードの企画・導入」（寺澤）
- ◆12 月 2 日（金)、ちば産学官連携プラットフォーム、IR コンサルティング実施(植草学園大学様・短期大学様、淑徳大学様）（寺澤、村田）
- ◆ 2 月 17 日（金)、GPS-Academic ラボ運営委員会（寺澤）

来客、視察（KUIS IR 部門）
- ◆10 月 6 日（木)、九州工業大学 教育高度化本部 学習教育センター 教授
- ◆10 月 17 日（月)、山形大学 学術研究院 教授
- ◆10 月 20 日（火)、大阪大学 グローバルイニシアティブ機構 准教授

講演会
- ◆10 月 17 日（月)、講演会「米国大学におけるデータに識(し)らされた大学経営の状況：山形大学 教授 藤原宏司先生」（学長室 IR 推進チーム、教育イノベーション研究センター（LTI）共催）

学内外の委員、役員
- ◆一般社団法人 大学 IR コンソーシアム 選挙管理委員会 選挙管理委員（村田）
- ◆一般社団法人 大学 IR コンソーシアム 中期計画検討部会 副部会長（寺澤）
- ◆一般社団法人 大学 IR コンソーシアム 広報・ワークショップ部会 委員（寺澤）
  （全国 66 大学加盟の IR 関係コンソーシアム）https://irnw.jp/
- ◆GPS-Academic ラボ 委員（フェロー）（寺澤）
- ◆神田外語大学 オープンバッチ管理者（寺澤）

特記事項
- ◆5 月、神田外語大学 IR ダッシュボードシステム「IRQuA（イルカ)」を企画・構築（新しく構築しました）
  ⇒詳細は本誌掲載の MJIR 発表原稿「神田外語大学における教学 IR ダッシュボードの企画・導入 ― IR Dashboard、Data Lake、Excel、Tableau の活用 ―」を参照。

- ◆2 月、企業対象のアンケート調査を実施（新しくはじめました）詳細は本誌の掲載箇所を参照。

- **◆3 月、神田外語大学ファクトブック～電子版～（新しく作りました）**
  ⇒神田外語大学 情報公表ホームページの上部のアイコン
  https://sites.google.com/kanda.kuis.ac.jp/kuis-factbook

＜学長室 IR 推進チーム 体制（2020 年 4 月 1 日より）＞
シニアマネージャー・専任 村田 裕司(兼務) チーフ・専任 寺澤 岳生(専従)

発行：2023 年 7 月 神田外語大学 学長室 IR 推進チーム
執筆(編集)・装丁(デザイン)：寺澤 岳生・村田 裕司